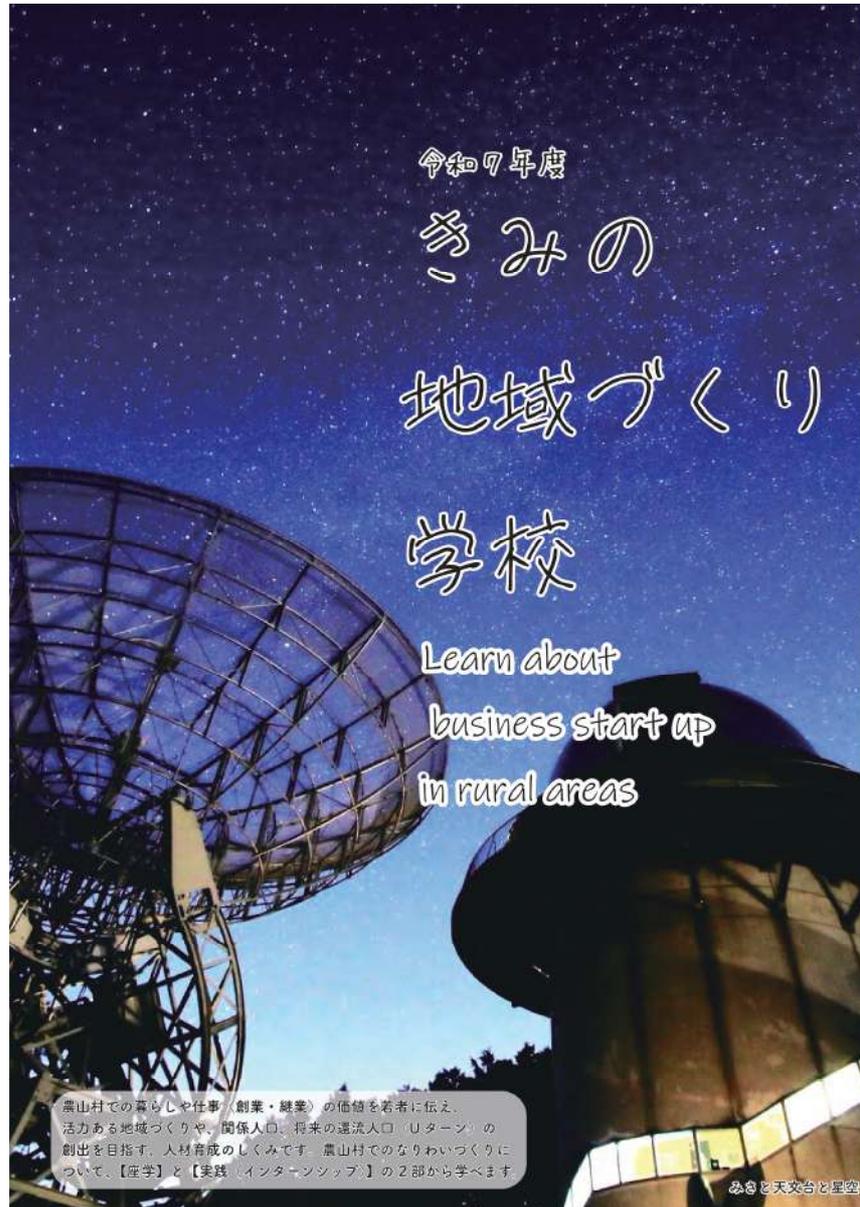


令和7年度

「きみの地域づくり学校」まとめ



令和8年3月

きみの地域づくり学校運営協議会 紀美野町

和歌山大学食農総合研究教育センター

目次

ご挨拶	P.2-4
令和7年度プログラム	P.5-16
座学編修了レポート	P.17-44
実践編修了レポート	P.45-50

ご挨拶

令和7年度「きみの地域づくり学校（座学編・実践編）」は、その全スケジュールを終え、残すところは修了式のみとなりました。事務局を務められた紀美野町まちづくり課職員の皆さんの献身的な努力に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。



「地域おこし協力隊員、行政職員、地域づくりに関心を寄せる社会人、地域住民、地元高校生と大学生」からなる多世代間の学びの場は、座学編では毎回50 - 60名余の参加を得て、成功裡にその責務を果たしました。また、実践編では、町内外のメンター事業者の協力を得て、4名の受講者が充実したインターンシップに取り組みました。

本まとめには、受講者の皆さんが得た「学び」「気づき」「繋がり」、そして「踏み出した一歩」が綴られています。「地域づくり」の学びにはゴールはありません。次年度は、座学編のプログラムをより充実するとともに、新たな参加者も得て、学びの輪を広げたいと考えています。同窓生の皆さんには更なるご支援をお願いします。

きみの地域づくり学校長 藤田 武弘

追手門学院大学 教授 / 和歌山大学 名誉教授

ご挨拶



「第3回きみの地域づくり学校」が、ご講義いただきました先輩事業者の皆さん、大学等の有識者の方々、運営に携わっていただいた皆さんのおかげにより、大きな成果をあげ無事に修了式を迎えることができました。そして熱心に通っていただいた参加者の皆様、ありがとうございました。

今年度で3回目の開催となりましたが、魅力ある地域づくりを地域の内外の方々とともに考え学んでゆくことによって、関係人口を創出することや、学生たちの地域の課題に向き合うきっかけを作り、定住、移住を考えた「まちづくり」を強めていくという「きみの地域づくり学校」の目的に沿うことができたのではないかと考えています。

次年度の開催につきましては、これまでの取り組みを考慮しながら、より多くの方々に参加していただけるよう、また共に「きみの地域づくり学校」を充実させる仲間が増えてゆくことを願って、新しいシステムにも取り組むこととしておりますので、よろしくお願い申し上げます。

2026年度春に、より多くの仲間の皆さんにお会いできることを楽しみにしております。

きみの地域づくり学校運営協議会長 山上 範子

学校法人りら創造芸術学園 理事長 / りら創造芸術高等学校長

ご挨拶

きみの地域づくり学校受講生の皆様、
修了おめでとうございます。この1年間、
大変熱心に勉強され、先輩事業者の下での
インターンシップにも励まれたことと思います。創業や継業等を通して、農山村で心豊かに幸せに生きたいと考えていらっしゃる皆様の夢が実現されるように私たちもしっかりと応援、お手伝いをしていきたいと思えます。



また、修了生の中から、紀美野町で起業や新規就農、棚田の再生活動への参加等の動きが起きており、きみの地域づくり学校をきっかけとした町内外の交流や紀美野の関係人口が着実に増えていることを実感しております。今年度修了された皆様も、紀美野で1年間学んでいただいたご縁を大切に、関係人口や還流人口としてつながり続けていただくとともに、当町へ、そして和歌山県へ移住を考えてくださる方や、さらには、なりわい創業をされる方が増え、全国各地で地域を支える人材として活躍して欲しいと心から願っております。

紀美野町長 小川 裕康

きみの地域づくり学校について

過疎化、少子高齢化が進む一方で、「田園回帰」と呼ばれる若い世代の移住が増えつつあり、移住せずとも地域に関わって応援する「関係人口」も注目されています。紀美野町においても、古民家カフェやレストラン、農家民泊やシェアハウス、6次産業化や木工・ITを使った製造等、特徴のある事業者が増え、交流拠点が生まれています。移住後や地域おこし協力隊の卒業後の仕事として起業・継業を考える方も多く、農山村での起業支援のための人材育成が求められています。また、大学進学等で町外へ出た若者の多くが都市部に定住することで地域の過疎化に拍車をかけています。若者が地域に関心を持ち、農山村で暮らすことの豊かさや意義を伝えていくことが、将来の還流人口（Uターン）に繋がると考えます。

このようなことから、農山村で「なりわい」を創業しようという若い世代を応援するしくみとして、大学等の教員及び紀美野町内外の先輩事業者等による全15コマの講座（座学）と、先輩事業者のもとでの6～9日のインターンシップ（実践）から構成される、「きみの地域づくり学校」を令和5年度から開校しました。関係人口・還流人口の創出や、地域おこし協力隊の起業・定住支援、行政職員のリスクリング等を目的に、地域の価値を若者に伝え、活力のある地域づくりを目指しています。これまでに、農山村地域での起業や農業に関心がある若者世代や、紀美野町への移住検討者、和歌山県内の地域おこし協力隊、地域づくりの学びを深めたい学生等、和歌山県内外から延べ164人が受講し、移住創業者や新規就農者、地域課題を研究する学生、ふるさとへUターン就職した学生等、多様な人材が育っています。

学校の趣旨に賛同いただいた紀美野町内の高校、区長会、商工業、観光業、農林業の団体や企業、有識者等により「きみの地域づくり学校運営協議会」（会長：山上範子ら創造芸術高等学校長）が設立され、学校の運営を行っています。

なお、紀美野町と和歌山大学は平成28年に地域連携推進包括協定を結んでおり、本学校もその一環で和歌山大学食農総合研究教育センターとの連携により実施しています。カリキュラム検討や講師依頼等、企画・運営において協力し運営を行っています。



令和7年度の概要① 受講生

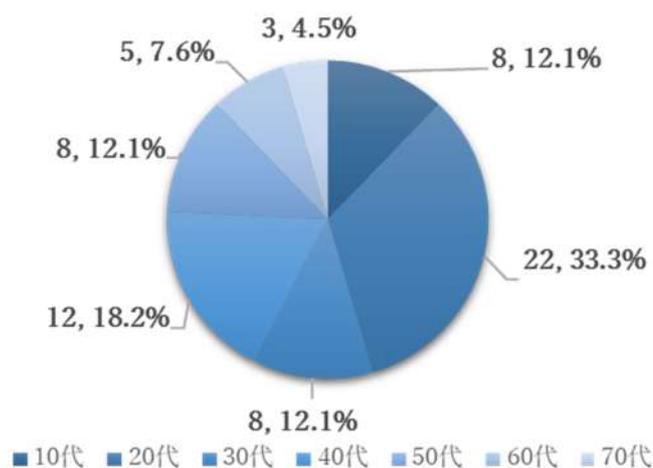
令和7年度は69人に受講いただきました。そのうち42人は、サービス業や食品小売業、農協職員、個人事業主、紀美野町民、県内5市町及び県振興局の地域おこし協力隊、行政職員等に参加いただきました。残りの27人は学生で、町内外から大学生や大学院生に参加いただきました。

民間企業等	13人
紀美野町民	7人
地域おこし協力隊	8人
行政（リスクリング）	14人
大学生・大学院生	27人
合計	69人

講義の受講やインターンシップ、交流会等を通して、多世代による学びの場、交流の場となりました。さらに、同じ思いをもった仲間や紀美野町内の事業者などとの繋がりづくりも行え、今後も地域づくりを担う人材としての活躍が期待されます。

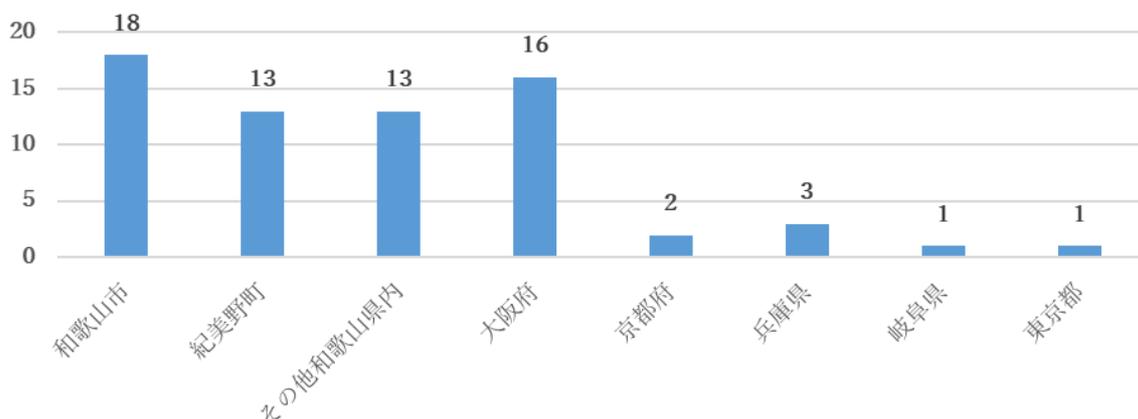
また、以下は、年代別、居住地別に見た受講生の割合です。

年代別 ※リスクリング2人は除く
 きみの地域づくり学校受講生 N=67



居住地別 ※リスクリング2人は除く

きみの地域づくり学校受講生 N=67



令和7年度の概要② カリキュラム

[座学編] Schedule

大学等の有識者や先輩事業者・地元事業者から学ぶ講座
全15講 (1日3コマ×5回)

<p>1 5/24 (土)</p> <p>都市農村交流と コミュニティビジネス</p> <p>12:00～12:30 開講式</p>	<p>都市農村交流と関係人口</p> <p>藤田 武弘 追手門学院大学教授 和歌山大学名誉教授</p>  <p>付度(そんたく)しない「よそ者・若者」の目線こそが地域のイノベーションには不可欠です。日常のなかに埋もれた地域の価値を一緒に掘り起こしましょう!</p>	<p>地域づくりから コミュニティビジネスへ</p> <p>木村 則夫 秋津野 代表取締役社長</p>  <p>地域資源を活かしながら、住民主体の持続的な地域づくりを実践している田辺市上秋津地区を紹介。秋津野が昭和30年代からいくつかの地域づくりの組織や法人を立ち上げながらコミュニティビジネスに至った経緯を学んでまいります。</p>	<p>民泊経営とインバウンド受け入れ</p> <p>玉置 敏明 北峯山机庵(ごつあん) ㈱玉一商会 代表取締役</p>  <p>「生業」とは自分自身やその家族が生きていく為に必要な最低限のお金を稼ぐことしかできない程度のレベルのことで、「創業」とは、個人事業であれ法人であれ、創業者が事業活動を継続し始めるという意味です。いざれにしても貧乏を楽しみな前に進まれへん言う事かな...一緒に考えてみまひよ。</p>
<p>2 6/28 (土)</p> <p>食産業の新たな 可能性と起業</p>	<p>農・食・観光業の変容、グリーン産業化の兆候を捉える</p> <p>尾藤 環 ㈱辻調理教育研究所 教育事業部 担当部長</p>  <p>今、国際社会はグリーン社会へと大きく舵を切っています。グリーン社会では、日本や地域の産業、そして職業はどのように変化していくのか?みなさんと一緒に考えたいと思います。</p>	<p>「ジブンの強み×地域の資源」で起業する</p> <p>岡 京子 ㈱わかやま産業振興財団 地域課題解決型起業 支援チーム マネージャー</p>  <p>私はビジネスへの助言が専門の中小企業診断士ですが、ビジネスを通してそれが自己実現し、夢が叶い、その結果、暮らしよい地域になることが「幸せ」と実感しています。紀美野、そして、みなさんの強みを活かすビジネスの実践を一緒に考えませんか?</p>	<p>紀美野町移住・創業物語</p> <p>尾上 泰江 きみのたから 焙煎体験カフェきたの</p>  <p>1年前に紀美野町に移住して、今年から山の中でカフェを始めました。紀美野町に来てからはやりたいことばかりやっています。どうしたらそんなふうになされるのか?移住前、現在進行形のカフェ起業、そして、この先の夢についてお話しします。</p>
<p>3 7/26 (土)</p> <p>農業の新たな展開 地域資源を活用した</p>	<p>農業・農村を取り巻く環境変化と 農山漁村発イノベーション</p> <p>岸上 光克 和歌山大学教授</p>  <p>皆さんも実感していると思いますが、豊かな食を支える農業、その食料供給とともに多面的機能を有する農村は危機的状況にあります。また、農業や農村を取り巻く環境も大きく変化しています。これからの農業・農村のあり方を一緒に考えましょう。</p>	<p>道の駅を核とした地域資源の 活かし方</p> <p>森本 健次 ㈱南山城 代表取締役 道の駅 お茶の京都 みなみやましろ村 駅長</p>  <p>風土を活かした農業で形成されてきた地域のいとなみ、神事や食などの文化は地域固有の魅力。道の駅は特産品や食文化などを来訪者にダイジェストとして伝えることができる場。あしもの資源に目を向け磨き上げることから、地域固有の魅力が生まれます。</p>	<p>紀美野町での果樹農業の実践、 人生100年時代の農業を見据えて</p> <p>南 秀和 南果樹園 園主</p>  <p>4haの露地栽培で周年出荷の果樹農業を行っています。果樹は15年位前から計画的に改植した若木ばかりで、収穫時にだけ半日雇用をして回しています。「無理をしないでまけなさい」農業で自分と妻に優しい素晴らしい紀美野町の果樹農業を目指しています。</p>

講義時間割 1 講目 12:30～14:00 2 講目 14:30～16:00 3 講目 16:30～17:30

特徴

- ・会社員や地元住民、地域おこし協力隊、行政職員、大学生、地元高校生など多世代、異業種が集う「学びの場」です。
- ・地域、行政、大学が一体となった産官学連携のプログラムです。



フィールド

紀美野町 (和歌山県海草郡)

早くから移住定住政策を手掛け、住民主体の「地域づくり」や移住・創業支援など様々な取り組みを意欲的に行っています。また、移住者等が特色ある事業を起こすなど新たに生まれた「場」が交流拠点となり、次の移住者や関係人口の創出につながっています。



令和7年度の概要② カリキュラム

new

1 コマから受講が可能になりました

参加自由

講義後、各回交流会あり / 2回程度のフィールドワーク

4 8/30 (土)

必要な人材育成
地域づくりに

求められる「連携力重視型人材」

牧野 光朗
追手門学院大学教授
前長野県飯田市長



「きみのを学び、きみのに愛着を持った若者は、高校を卒業してもきみのとの関係を持ち続け、子育て世代になる頃には、自分の子どもはきみので育てたいと考えてきみのに戻り、きみのを担う人材となる - 目指すはこれ。

地域の課題解決と人材育成

日下 もえぎ
株式会社ナチュレバース 総本部
ゼネラルディレクター



新たな地域創生モデルとして、人材活用とマーケット創出を通じた持続発展可能な地域づくりを目指し、構造的な社会問題を解決する仕組みを発展させていく真のリーダーが必要です。紀美野町を真のリーダーを育成・輩出し続けられるというブランドにしましょう。

DX化が生んだグローバルな製造業務とCSR活動を軸とした他機関との連携

佐々木 彰央
アンフィ合同会社 代表



当社は2018年に紀美野町で創業した3D技術を活かした博物模型専門会社です。DX化が進む現在だからこそできる地方と世界を繋ぐ仕事内容と、当社の専門性を活かしたCSR活動とそれに伴って実施している他機関・団体との連携を紹介いたします。

5 9/27 (土)

関係人口と農村移住

田園回帰時代の農山村再生

関司 直也
法政大学教授



農山村の地域社会が変化してきた背景を理解し、個人と地域を、また暮らしと仕事をつなぐ「なりわい」に着目して、先発的な地域づくりの取り組みを読み解きながら、田園回帰時代の農山村再生のあり方を考えます。

農村移住の推進と関係人口

阪井 加寿子
和歌山大学特任教員



最近では、全国的に移住推進や関係人口創出の事業が行われ、田園回帰の動きは若い世代にも広がっています。人の動きに視点をおいて、これまでの取り組みを振り返り、持続可能な「地域づくり」を考えます。

農山村移住と複業

中野 卓
Kimino-Labo 代表



少子・高齢化、人口減少など多くの課題がある紀美野町において、これからの仕事の仕方や暮らし方について、考えながら試行を繰り返している実践記をご紹介します。皆さんの参考になれば幸いです。

[実践編] Mentor

実践者をメンターとした現場でのインターンシップ 6~9回程度

宿泊業

- ・美里の湯 かじか荘
- ・たまゆらの里
- ・風の古民家「うえみなみ」
- ・Cafe&Guest House きみの さいか亭



飲食業

- ・くらくくり (食堂&カフェ)
- ・ベーカリーテラス ドーシェル (パン&カフェ)
- ・きこりのピザ屋 SOMAUD- ソマウド- (ピザ&カフェ)
- ・Cafe&Guest House きみの さいか亭 (和カフェ)
- ・キミノーカ (ジェラート) ※内容は要相談



農業・林業・6次産業

- ・小川地域棚田振興協議会 (米)
- ・きみのフルーツ (柑橘)
- ・(株)上中林業
- ・和花菜農園 (米・もち米・野菜等 無施肥無農薬栽培)
- ・向ファーム (緑花木生産)
- ・みさとみらいファーム (栗・梅)
- ・秋津野ガルテン【田辺市】
- ・農業生産法人(株)Citrus- シトラス-【有田川町】
- ・紀州柑橘 善兵衛農園【湯浅町】



製造業

- ・アンフィ合同会社 (博物模型専門製造)
- ・棕櫚箒製作舎 ※説明のみ



地域資源活用

- ・毛原オートキャンプ場
- ・Katakoto Crafts (古民家リノベーション)



メンターの声



水島 千絵
Cafe & Guest House
きみの さいか亭 代表

さいか亭では、2023,24年に1名ずつ受講生を受け入れました。和菓子/弁当の仕込み、宴会の準備~配膳、宿泊の準備等と一緒に行いました。お話をしながらの作業が楽しく、私も刺激を受けています。このインターン経験が将来の参考になれば嬉しいです。



南出 典子
風の古民家
「うえみなみ」代表

「うえみなみ」では1名インターンシップ生を受け入れました。お客様企画のワークショップの参加や手伝い、お帰り後の片付けもお願いしました。お客様とのコミュニケーションを通じて宿の魅力もヒアリング。体験をビジネスにすることも一緒に考えてくれました。

座学編第 1 回

テーマ：都市農村交流とコミュニティビジネス

【日にち】令和 7 年 5 月 24 日（土）

【参加者】受講生 34 人（社会人 17 人、大学生・大学院生 17 人）、
スタッフ 8 人、運営協議会会員 6 人、その他（引率者等）10 人 計 58 人

＜開講式＞

紀美野町長 小川 裕康 挨拶
きみの地域づくり学校長 藤田 武弘 挨拶
和歌山県海草振興局長 萩原 享氏 御祝辞



＜第 1 講＞

「都市農村交流と関係人口」 藤田 武弘（追手門学院大学教授/きみの地域づくり学校長）

日本における都市農村交流の背景や農村、農業への意識の変化、農的関係人口の創出等、きみの地域づくり学校の核となる総論的なお話をいただきました。

受講生の感想より

- ・自分も含めて、若者たちがけん引して都市と農業との関係人口構築に務めたいと思う（民間企業等）
- ・地域に都市住民を送るためには地域自らが積極的・多角的に展開する必要があると知った（大学生）



＜第 2 講＞

「地域づくりからコミュニティビジネスへ」 木村 則夫氏（株式会社秋津野社長）

田辺市上秋津地区における 30 年以上にわたる農業者を中心とした住民主体の地域づくりとコミュニティビジネスの蓄積をお話いただきました。

受講生の感想より

- ・最も重要なことは木村社長をはじめとする方々（人）と熱意だと感じました（民間企業等）
- ・成功の裏に長い長い地域づくりの歴史があった事を今日は初めて知りました（行政）



＜第 3 講＞

「民泊経営とインバウンド受け入れ」 玉置 敏明氏（北峯山杵庵/有限会社玉一商会代表取締役）

「玉一商会」とともに移住をしてからの十数年で、人との出会いをきっかけに、農家民泊やインターネットラジオも始められた経緯や思い、複業の大切さや良さについてお話いただきました。

受講生の感想より

- ・宿泊業をしようと考えているので、今回の話は大変参考になった（民間企業等）
- ・綿密な計画より人とのつながりという言葉が印象に残りました（行政）



座学編第2回

テーマ：食産業の新たな可能性と起業

【日にち】令和7年6月28日（土）

【参加者】受講生 44 人（社会人 26 人、大学生・大学院生 18 人）、
スタッフ 9 人、運営協議会会員 6 人、その他（引率者等） 7 人 計 66 人

＜第4講＞

「農・食・観光業の変容、グリーン産業化の兆候を捉える」

尾藤 環氏（株式会社辻料理教育研究所 教育事業部 担当部長）

国際社会での食の倫理観や持続可能性重視への意識変化や、日本社会の変化の兆しを踏まえ、「Well-being」や「SBNR」等のキーワードをご紹介いただきました。

受講生の感想より

- ・農村地域の観光に関わる立場なので、テロワールや日本の食文化への理解をさらに深めていきたいと思います（協力隊）
- ・SBNR のことを知らなかったけれど、終活でワークライフバランスを求めたり、趣味や余暇時間の充実に向けて生活していることに気づきました（大学生）



＜第5講＞

「『ジブンの強み×地域の資源』で起業する」

岡 京子氏（公益財団法人わかやま産業振興財団 地域課題解決型起業支援チームマネージャー）

和歌山県内での起業支援の経験や国内外の事例から、紀美野での起業に活かせるヒントを多数いただくとともに、講義後半はワークを通じて自分に何ができるか想像を膨らませることができました。

受講生の感想より

- ・地域づくりに必要な「つくり人」「つながる人」「語る人」になれるようにしたい（協力隊）
- ・ワークでは隣の方とお話しながらアイデアを出せて楽しかった（大学生）



＜第6講＞

「紀美野町移住・創業物語」 尾上 泰江氏（きみのたから 焙煎体験カフェきたの）【第1期生】

本学校修了生の特別講義として、移住そしてコーヒー豆の焙煎が楽しめるカフェを開業するに至った理由やオープンまでの過程について丁寧にお話しいただきました。

受講生の感想より

- ・移住者として、起業人としてより身近で生の感想、苦勞を聞けてとてもよかったです！（協力隊）
- ・移住されてから始めたというお話を聞いて自分のやりたいことを始めるのに遅いなんてことはないんだと感じました（大学生）



座学編第3回

テーマ：地域資源を活用した農業の新たな展開

【日にち】令和7年7月26日（土）

【参加者】受講生 37人（社会人 21人、大学生・大学院生 16人）、
スタッフ 10人、運営協議会会員 7人、その他（引率者等） 11人 計 65人

＜第7講＞

「農業・農村を取り巻く環境変化と農山漁村発イノベーション」 岸上 光克氏（和歌山大学教授）
農業構造や農村の変化、農業・農村政策の変遷を確認した後に、既存の6次産業化や農商工連携等の課題を踏まえつつ、「農山漁村発イノベーション」の説明をいただきました。

受講生の感想より

- ・環境変化に敏感になりながら、地域づくりに関わっていくことが大事だなと考えさせられました（民間企業等）
- ・農業の危機的状況は危機を超え、崩壊に向かっていると学びました（大学生）



＜第8講＞

「道の駅を核とした地域資源の活かし方」
森本 健次氏（株式会社南山城 代表取締役/道の駅「お茶の京都 みなみやましろ村」駅長）
お茶の一点突破や地域内外との連携等、「地域商社」として地域資源を地域外へと売り込み、全国ランキング1位にも輝いた道の駅の運営実態についてご講義いただきました。

受講生の感想より

- ・「村に必要なことを村の人が取り組み、それによって村の人が利益を享受する」という考え方は（中略）これからの「道の駅」の地域拠点化を進めるうえで非常に重要な考え方であると勉強になりました（民間企業等）
- ・外からふってきたアイデアに乗っかるだけではなく、「考え方をつくる」ということが、愛される道の駅（場所・コミュニティ）をつくるうえでとても重要だと思った（大学生）



＜第9講＞

「紀美野町での果樹農業の実践、人生100年時代の農業を見据えて」 南 秀和氏（南果樹園 園主）
果樹農業の周年出荷をされておられる南講師から、紀美野町が全国有数の産地である「ぶどう山椒」に絞り、生産の様子や加工業者との連携等についてご講義いただきました。

受講生の感想より

- ・土地にあわせた農業が周年出荷につながったお話や、自給自足に必要な面積収量など地域づくりの基礎となるデータを聴講でき楽しかった（民間企業等）
- ・実際に農業をされている方の話を聞く機会はありませんので、普段行う業務で出している補助金の意味や効果を感じることができました（行政職員）



座学編第4回

テーマ：地域づくりに必要な人材育成

【日にち】令和7年8月30日（土）

【参加者】受講生26人（社会人17人、大学生・大学院生9人）、
スタッフ10人、運営協議会会員4人、その他（引率者等）9人 計49人

《第10講》

「地域が求める『連携力重視型人材』」 牧野 光朗氏（追手門学院大学教授）

地域を愛し理解して地域に貢献する人材を育む「地域人教育」や産業人材育成といった高校での人材育成の必要性と事例紹介の後、地域外の専門人材誘致をテーマにワークショップを行いました。

受講生の感想より

- ・地域の人を巻き込む人材（人たらし）が実はキーマンとなる事が目から鱗でした（民間企業等）
- ・これから地域と関わっていく際は、「自分にはできない」と地域の可能性を潰すのではなく、足りない部分は他者と協働して地域に貢献していきたいと思えました（大学生）



《第11講》

「地域の課題解決と人材育成」

日下 もえぎ氏（株式会社パソナグループ NATUREVERSE 総本部 ゼネラルディレクター）

世界から観光客を呼び込む「ニジゲンノモリ」を中心とした淡路島での地方創生の取り組みや、地方に不足する地方創生マーケットの育成に向けた専門職大学院の構想についてご紹介いただきました。

受講生の感想より

- ・大きく見てコーディネートする人が必要という話、とてもよく分かりました（行政職員）
- ・“地方において足りないものは「商品」ではなく「顧客視点」”のご指摘は、文字通り私の心に刺さった（大学院生）



《第12講》

「DX化が生んだグローバルな製造業務とCSR活動を軸とした他機関との連携」

佐々木 彰央氏（アンフィ合同会社 代表）

世界と繋がり、3Dプリンターを活用した博物館模型の製造を手掛けられる佐々木講師の最新の研究内容と、地域団体との連携や住民が参加可能なイベント開催等のCSR活動を紹介いただきました。

受講生の感想より

- ・専門性を持った人材が、強みを存分に発揮して、思い思いに仕事に取り組むことができる環境は良い人材教育の場であると感じました（大学生）
- ・自分の専門性を活かして、楽しそうに仕事している姿がとても伝わってきた（大学生）



座学編第5回

テーマ：関係人口と農村移住

【日にち】令和7年9月27日（土）

【参加者】受講生 31人（社会人 20人、大学生・大学院生 11人）、
スタッフ 6人、運営協議会会員 6人、その他（引率者等）4人 計 47人

《第13講》

「田園回帰時代の農山村再生」 関司 直也氏（法政大学教授）

過疎化が進む農山村での若者を中心とした地域づくりへの関わり方の変化や、地域再生の実践例として、地域自治の事例や、移住者や地元若手による小商いが広がる地域の事例を紹介いただきました。

受講生の感想より

- ・先進事例の成り立ちはパッと見偶然の産物のように捉えてしまいがちですが、（中略）交流や関係つないでおくことの大切さを再認識した次第です（民間企業等）
- ・「人口は減っていても人材はある」この言葉にすごく重みというか深みを感じました（大学生）



《第14講》

「農村移住の推進と関係人口」 阪井 加寿子氏（和歌山大学特任教員）

都市部から農村への移住の現状や過疎対策の施策、移住の中間支援機能、また、紀美野町における移住創業者の実態調査結果等、様々な側面から移住の動きを捉え直すぐ講義をいただきました。

受講生の感想より

- ・紀美野町や那智勝浦町の移住者の実態や、自治体の移住者拡大の取り組みが良く分かりました（民間企業等）
- ・（二地域居住に関して）、今後行政の立場でどのような点に注意しながら、住民の方、移住者の方がうまく関係を構築する支援をできるかを考えていきたいと思いました（行政職員）



《第15講》

「農山村移住と複業」 中野 卓氏（Kimino-Labo 代表）

紀美野（国吉地域）を拠点としながら、まちづくり活動や、都市部での仕事等、複数の仕事を組み合わせた「複業」での暮らしのリアルな様子についてご講義いただきました。

受講生の感想より

- ・移住してくださった方の活動は知らないだけでバラエティに富んでいるのだと思いました（町民）
- ・地域の「複業」について経験談を聞くことが出来て良かったです（協力隊）



座学編フィールドワーク

≪第1回 「まちづくり応援団 team2020 in kimino」≫

【日にち】令和7年7月27日（日）

【参加者】受講生3人

フィールドワークの第1回は、希望者3人が、紀美野の豊かな自然を活用して、自然体験プログラムを提供されておられる「まちづくり応援団 team2020 in kimino」を訪問しました。まず、スタッフとして同行しながら、参加者とともに貴志川でのリバートレッキングのプログラムの様子を体験いただきました。その後は、代表の前峠氏より、団体の活動内容やメンバー紹介、持続的なまちづくり団体を目指しておられること、紀美野でのアクティビティ展開の課題と可能性等、事業化のヒントとなる様々なお話をいただきました。



打ち合わせ



受付補助



リバートレッキング同行



前峠氏によるレクチャー

≪第2回 「小川地域棚田振興協議会」≫

【日にち】令和7年9月28日（日）

【参加者】受講生4人

フィールドワークの第2回は、希望者4人が、生石高原の麓に広がる「中田の棚田」の再生に取り組む「小川地域棚田振興協議会」を訪問しました。まず、現地見学として、会長の北氏や、地域おこし協力隊の和田氏に案内をいただきながら、稲架掛け直後の棚田や、棚田周辺にあるハゼやカヤ、シュロといった紀美野町で昔から利活用されてきた特産林産物等、現地を見て、触れて体感できる貴重な機会を提供いただきました。見学後は、活動や稲作（農業）、今後の展開等について、様々な角度からの質疑応答や意見交換が交わされ、非常に有意義な時間となりました。



棚田の現地見学



質疑応答や意見交換



最後に記念撮影

実践編（インターンシップ）

【期間】令和7年10月1日（水）～12月31日（水）

【場所】各受入事業者による

【受入事業者】4事業者

【参加者】受講生4人（社会人3人、大学生1人）

【内容】

メンターとなる先輩事業者のもとで事業の実務等について学び、創業・継業のイメージを膨らませていただくことを目的に、希望する受講生がインターンシップに取り組みました。現場での作業体験や事業説明に加え、メンターには受講生からの疑問・相談にお応えいただく等、短期間ではありましたが、受講生にとって、各業種の働き方への理解を深めるとともに、今後必要となるスキルや考え方等について学びを深めていただく機会となりました。

NO	事業者	詳細
1	風の古民家「うえみなみ」（宿泊業） 標高300メートルの山の中に建つ、築300年の登録有形文化財の古民家で、1日1組限定の宿を運営。一棟貸しのログハウスも運営。	1人（行政職員）／ 2日 宿泊準備や片付け等
2	小川地域棚田振興協議会（農業） 600年以上の歴史をもつ「中田の棚田」の美しい自然と農業文化を次世代に残すために、棚田の再生や維持管理、ワークショップ等に取り組む。	1人（自営業）／ 8日 稲刈り、田んぼの整備、勉強会参加等
3	みさとみらいファーム（農業） 2020年に紀美野町へUターンし、新規就農。現在は、露地きゅうりや南高梅、ぶどう山椒等を栽培。	1人（地域おこし協力隊）／ 4日 山椒畑整備、紀州うすい種まき、獣害対策用罫設置等
4	KATAKOTO CRAFTS（建築業） 建築デザイン・施工・コンサルティングを行う。加えて、別法人にて「Shared Residence Flag」（シェアハウス）や「Guest House Pin」を運営。	1人（大学生）／ 4日 改装中の現場見学や作業体験、シェアハウス手伝い等



第3回修了式

【日時】令和8年3月7日（土）10時15分～12時30分

【場所】紀美野町総合福祉センター 3階多目的ホール

【内容】

修了要件（※）を満たした受講生に修了証書を授与しました。今年度の受講生69人のうち修了生は23人（うち、実践編修了は4人）でした。また、受講生の代表者による1年間の成果発表や、特別講義として和歌山県地域振興課の宗野課長より、県内の過疎地域の現状と対策について事例紹介をいただきました。当日のプログラムについては下記をご参照ください。

第3回
きみの地域づくり学校修了式

2026
3/7
土曜日
10:15 - 12:30
(10:00開場)

きみの地域づくり学校では、麓山村地域での「なびわい創業」について、座学と実践の両面から1年間かけて学んできました。修了式では、修了証書授与とともにその偉大成となる成果発表を行います。

また、特別講義として、和歌山県地域振興課の宗野課長をお招きし、和歌山県内の過疎地域の現状と、各地域でどのような取り組みがなされているのか、関係人口の動きを聞きながらご講演いただきます。

学びを活かし、それぞれの立場で次の第一歩を踏み出そうとする修了生たちの晴れ姿をぜひご覧いただけましたら幸いです。

会場 紀美野町総合福祉センター
3階 多目的ホール
(和歌山県海南郡紀美野町下佐々1408番地4)

申込方法 申込フォーム、FAX、電話でお申し込みください。
申込内容は裏面をご覧ください。
※何らかの交換や情報提供が必要な方はお問合せください。

参加費 無料

会場MAP

お問合せ・申込先
きみの地域づくり学校運営協議会事務局
〒640-1243
和歌山県海南郡紀美野町神野市場226-1
紀美野町役場まちづくり課内 担当：山本、大林、藤井
TEL 073-495-3462 FAX 073-495-3334
E-mail support@kimino-cds.org

【主催】きみの地域づくり学校運営協議会
【共催】紀美野町、和歌山大学食農総合研究教育センター
【後援】和歌山県

プログラム	
10:15	開会
	修了証書授与
	受講生成果発表 「きみの地域づくり学校で学んだことと今後の展望」 紀美野町民 NPO法人ヤマックル・アグロフォレストリー 理事 奥田 郁子 氏 一般 ワイエヌ・サポーターズ 野際 義久 氏 地域おこし協力隊 田辺市地域おこし協力隊 垣本 裕一郎 氏 大学生 和歌山大学観光学部 芝 芽衣 氏
	講評 きみの地域づくり学校運営協議会長 山上 範子 小川地域棚田振興協議会長 北 裕子
11:15	特別講義 「和歌山県における過疎地域の現状と対策」 和歌山県地域振興課 課長 宗野 孝信 氏
12:30	閉会

※修了要件は下記のとおりです。

【座学編】座学編（全15コマ）に6割（9コマ）以上ご出席の上、座学編レポートを提出された方に「座学編修了証書」を授与いたします。

【実践編】実践編を受講し、座学編・実践編双方のレポートを提出された方に「座学・インターンシップ修了証書」を授与いたします。

座学編

修了レポート

テーマ

「座学編で学んだこと」

この度本講義に参加するにあたって、きっかけとなった出来事が二つある。一つ目は、前年に私が所属する JA わかやまと和歌山大学が共同で開催している寄附講義「食と農のこれからを考える」に参加していたこと。二つ目に紀美野町へ転居することになったことだ。二つの講義を受けた印象をそれぞれ述べると、前者は大学の一般講義ということもあって、分野が多岐に渡っていた。一方きみの地域づくり学校の方は、座学でもより深く実践的な内容を含んでいるように思う。

とりわけ親しみも相まって熱心に聞き入ったのは、第二回に登壇された尾上さんの「紀美野町移住・創業物語」である。前年の受講者であった彼女が紀美野町に移住し、カフェきたのを開業するまでの叙情的なライフヒストリーは、大変胸を打たれるものだった。尾上さんの行動力と決断力をぜひ見習いたいと思う。

次に興味深かったのが、道の駅を核とした地域資源の活かし方を伝えにきた「お茶の京都みなみやましろ村」駅長の森本さんの話である。村の特産品であるお茶に商機を見出し、日本一位の道の駅にまで成長させた森本さんの辣腕ぶりは目を見張るものがあった。そこで再認識したのが、ソフト面の重要性である。ブランディングにおいて、コンセプトが不明瞭だったり、外見ばかりに囚われて中身が伴っていなかったりすれば、当然に失敗する。したがって、何事も根気強く地道に作り上げていくように心がけたい。

そして、第四回では初めてグループワークを行った。実際の事例を基にして、地域おこしに必要な不可欠な人材とはどのような人物か、人材を呼び込むためにどのような工夫が必要か等々を皆で議論した。最終的にその事例におけるキーパーソンは、生き字引とも言われた旅館の女将さんであった訳だが、このような人物を醸成する地域づくりが何より大切であることを学んだ。加えて、自分が出来ないことを補ってくれる人物が重要だという視点に目から鱗が落ちた気がした。自分はどちらかという与他人に頼らずに、自分だけで完結したいタイプの間人である。しかしながら、自分ひとりでは出来る範囲に限界があり、どうしても足踏みしてしまう。その欠点を補佐し、ともに歩んでいけるような人材に自分もなっていけるように努力したい。

最後に座学編では多様な視点と新鮮な学びを得ることが出来た。講師陣や運営の方々に感謝の意を述べるとともに、今後ともこのような素敵な取り組みが続いていくことを願う。

本学の受講も3年目となり、秋津野やそれ以前からの地域づくりの学びは10年を軽く超えたが、刺激を受けることによる行動意欲の活性、人脈の形成や新たな知見の享受など、藤田校長が重視されておられる学びの継続の重要性は言わずもがなであると再認識した。更に私にとっては、秋津野では学びの場を脱却できていないが、紀美野ではやっと地域での実装に参画することとなり、とにかくにもまずは副業として紀美野町で事業に関わるところまで来たところである。正直なところ、100歳まで生き永らえるとは思わないが、この先10年20年くらいは人生の2ndステージとして、この場所で社会に貢献していきたいと思う。紀美野町には今後もお世話になると思いますのでよろしくお願いします。

本来は今年度の授業の感想をまとめるのだが、上記のとおり継続して参加していることから今更感もあるので、今回は事業を始めるにあたり、これからの展望というか希望を述べて今年度のまとめとした。

紀美野町は関西大都市圏近郊の知られざる町という認識だったが、SNSの影響や移住志向の高まりから、ここ1、2年の間にも町内有志や新たに移住した方によって、ぽつぽつと興味深い観光資源が生まれてきている。また、町内をざっと走っただけでも、「ここいいね」という里山風景がそこかしこにあり、高野山を含め周辺市町村を含めた広域観光エリアとして、様々な体験型観光プランが出来そうだと思う。そのためにあらゆる観光財産を掘り起し、その活用、あり方はもとより、例えば施設整備や交通手段をどうするかといった諸々の課題も含めた基礎調査及び検討を行ってみてはどうかという提案を行いたい。

ここで手法として考えられるのが、次年度の地域づくり学校に参加した学生の皆さん主体でフィールドワーク型の調査を行ってもらうことである。補足すると先日、藤田校長からの声かけもあり、追手門学院大学地域創造学部創設10周年記念講演を拝聴させていただいたが、第2部のセッションにおいて、学生が地域づくりに参加するフィールドワークが地域にとっても重要であるといった話があった。大学の地元である茨木市の都市計画課長の話にもあったが、行政の方針を具体化する制約のあるコンサル委託とは異なり、経済性に偏る社会のしがらみに囚われない自由な発想と行動力で、これから学生たちが直面し解決する一つの大きな社会課題に実際に立ち向かうことで、地域づくりに携わりたいという志を持った学生の皆さんに社会への最初のステップを上がってもらう場としてもらえればと考えている。

事業を行うにあたり、交通費宿泊費の実費確保を含めた産官学連携の補助金利用を考えているが、町を通しての補助金申請や民間企業を含め執行体制をどうするかなどまったく調整しておらず、現時点では妄想レベルの意見であるが、次年度以降の地域づくり学校の意義向上も含め、事務局には是非ご検討をお願いしたい。私ももちろん全面的に参画させていただく所存です。

会社の仲間からの誘いにより今年度初めての受講となりましたが、初めて見聞きする内容が多く様々な講師の方々から沢山学ばせていただきました。

私自身は大阪府の北摂地域のいわゆる都市部で生まれ育ち、祖父母はより都会の大阪市内に住んでいたことから、幼少期より農山村と関わる機会が少ない人生を歩んできましたが、そのことでかえって地方への憧れや魅力を感じる思いがあり、キャンプ等を通じて度々訪れて参りました。脱サラをして農村部へ移住することを真剣に考えた頃もありましたが、実際に居住することの難しさ（豊かな自然に触れ合うことだけでなく地域の方々との関係構築等）が先立ち躊躇してきたのも事実です。しかしながら今回の受講を通じて、農業・農村は危機的状況を通り越していつの間にか崩壊に進んでおり、大きな転換点にある（岸上先生）ことを知りました。現状を放置するのではなく農山村の活性化に自身がどのように係わることができるのか、今回の受講を参考に行動に繋げて参りたいと考えます。

農山村における「賑わい」や「なりわいづくり」は、地域の事情により様々であり地域に応じたアプローチが求められる（図司先生）難しさや面白さがあると共に、プロダクトアウトではなくマーケットインの考え方の徹底（日下先生）に根差したものであり、達成しようとする方々の試行錯誤や熱意（木村先生、森本駅長）が重要なポイントになり、地域の方々を巻き込む人たらしがキーマン（牧野先生）になるとも感じました。

一方で、世界から見ても日本は独自の優れた文化や価値観を有しており、パッシブデザイン等の見直されるべき世界をリードする要素が実は沢山含まれていること（尾藤先生）も学びました。昨今のインバウンド需要は、単なる割安感だけでなく日本独自の先進性への興味も含まれているのだろうと思い直しました。農山村の活性化に向けては、このような要素を捉えた取り組みも重要になってくると考えます。

和歌山県内でのこれまでの移住・定住施策が着実に成果を出し、その関心が高まりを見せる（阪井先生）中で、更に促進していく為には、実際に行動しようと考えている方々の起業に対する閉塞感やリスクを払拭する必要があり、エコシステムとして要所要所で伴走する仕組みが大事（岡先生）になってくると考えます。この学校で学びながら実際に移住された（尾上さん）や独自に移住され活躍されている方々（玉置さん、佐々木さん、中野さん）には実体験から良かったことと大変だったことを学びました。また、実際の農作現場の創意工夫や苦労話（南さん）も教えていただきました。様々な立場の講師陣より受講できたことを通じて「地域づくり」への自身の関わりを深めて参りたいと考えます。

今回初めて「きみの地域づくり学校（“本学校”）」に参加しました。きっかけは、今年2月紀美野町内の古民家を借り、「みんなの居場所」作りに取組む友人サークルに参加したことで紀美野町に接点を持ったことです。それまで、紀美野町を訪れることはほとんどなかったが、サークル活動を通し、紀美野町に対する興味が湧きました。以前より、地元和歌山・地域の活性化に興味があったこともあり、新たな知識習得や人的交流の機会を持ち、私自身の新たな活動のステップ・きっかけづくりとなることを期待し参加を申し込みました。

座学編では、全15コマのうち、第3回を除く12コマ（8割）に出席しました。全体を通して学んだことは、地域づくりは一人ではできないこと、一人で行なう必要はないこと。とりわけ、第10講義での、「自己完結型」では地域の課題は解決できない、求められるのは「連携力重視型人材」であることは新たな学びでした。自身を振り返り評価するならば、自己完結型、人的ネットワーク作りが弱いと考えます。本学校の受講生・関係者の皆さまは、自身の弱み・できないことを補っていただけるパートナー（候補）であり、その方々と連携し課題解決を図る関係性の構築（連携力）ができれば本学校で学んだ成果になると考えます。

地域づくりは、行政に大きく依存せず、地域住民や地域に関わる人が、その地域を良くしよう、活性化したいという内発的・住民主体の熱意と総意の醸成が重要であることも学びました。自分ごとから地域ごととして捉えることが大切。年齢や性別に関係なく同じような課題意識を持った者同士が集まり、課題の形成→課題解決に向けた議論・計画策定→実行という一連の行動が求められると思います。このような行動を継続・学習（PDCA）することで、必要な人材が育成され、関係人口が生まれると思います。当初リーダーの存在が重要で、地域外から招聘することも良いと認識します。

講義に加え、オプションのフィールドワークに参加しました。第1回「貴志川リバートレッキング」では、運営サポート、参加者との交流を行ないました。受入団体様から活動状況等の説明を受け、活動を継続する上で収益の確保（事業性）が大切であることを学びました。参加されたご家族の笑顔が印象的でした。第2回「中田の棚田再生プロジェクト」では、受入団体様より活動状況の説明を受け、棚田の現地見学をしました。棚田再生は、単に米作りの再生ではなく、その地域の伝統行事・文化や歴史を含めた総合的な地域再生につながることを学びました。フィールドワーク後、ボランティア活動の「棚田サポーターズ」に登録しました。微力ですが、棚田再生に協力させていただきたいです。

私自身が今取組んでいる「終活」の普及活動は、地域の高齢者の悩みや課題の解決を支援することです。高齢者の将来の不安を軽減し、元気で幸せに暮らせる“幸齢社会”の実現は、地域の大きな課題解決に資すると考えます。課題解決のため、様々な人が関わることで地域にイノベーションが起こることも期待したい。本学校での学びを活かし、活動を見える化しパートナー探しと連携を模索し、将来的にコミュニティビジネスとして成立することを目指したい。

本学校は、「共創の場」でもあり、同じような課題意識を持った者が集まる素晴らしい場所です。本学校の継続・発展、さらなる「連携力」の拡大を願います。

最後に本学校の講師ならびに事務局の皆さまに感謝いたします。

令和7年度になって、私は一つの人生の選択をしました。

今年度末で勤続28年の仕事をやめるという決意をしました。私はこれまで、行政という仕事をしたいと思って就職していないということが頭の中であって、親の勧めで就職し、家計を助け、辞めたいと思いつつ働いてきました。

行政という仕事は、人の人生を応援したり、人が喜ぶことを考え企画し、法に則り制度化していく。そこには大変やりがいもあり、楽しかったことも多かったです。

また、結婚し子どもが4人できたことで、辞めることをあきらめ過ぎてきました。4人の子育ては振り返ると、ちょうど夫の両親の介護なども重なり、毎日息をしてきたのか、ちゃんと寝てたのか、自分の時間はほとんどなかったなど、思い返すと楽しいことも多かったが反面胸が苦しくなることがあります。

また、娘が不登校であったため、仕事の昼休みには彼女と一緒に過ごすため45分間、片道10分の道のりを帰宅し、嬉しそうに階段を下りて来る娘と2人で他愛もない話をして、せわしく昼食をとり、じゃあ行くねと仕事に戻った日々があります。そのことで上司に仕事は文句はないのだけど、と言いつつ課題ありという評価をされたことがあります。

私は、自分の人生を送れていないばかりか、報われない人生を送ってきたと感じていました。そんな中、人生というものを見つめ返すことができました。それは、今週末一緒に過ごそうと話していた同級生の友人が突然亡くなり、人生は永遠ではないということを改めて思い知らされたのでした。

前置きが長くなりましたが、そういうふつふつとしていた時に何気なくインターネットで「きみの地域づくり学校」のページに目を奪われました。

これまでもよく和歌山には訪れ、5月になったら、ミカンの花の香りいっぱいの山道を窓を開けて肺一杯取り込んだり、桃の季節は行列に並び、ぶどう山椒の時期には房なりになった山椒の実とちりめんを求めて山から海まで本当に私を癒してくれていました。

特に、紀美野町は子育て中にもキャンプや川遊び、無料の公園も多く、パン屋、カフェなど本当においしくて大好きな町でした。その町が地域づくり？学校？大学教授が校長で、実践編まであるなんて、なんて面白そうな企画なんだ、聴講生感覚で受講を決めました。

ところが、毎回町長が最前列で話を聞いているし、役場の人はなんだかフレンドリーだし、地域おこし協力隊の制度もほとんどわからないけどなんだか和歌山全域から講義を聞きに来ているし、大学生はいっぱいやし、カオスや…。と正直思いました。

と、どこかお客さんでいながらも、交流会にも毎回参加させてもらって、だんだんと、地域のことを役場が主体となって考えているのではなく、地域の人々が主となって運営していることが分かってきて、すごくうらやましいなとおもいました。また、自分が行ってきたカフェやご飯屋さんなども移住者の方が営んでおられ、地域を盛り上げる主人公になっているのだと。また、講義を通じて、紀美野町は移住者にやさしくまた、自分らしく輝いて人生を楽しんでおられる姿が素敵でまぶしかったです。

きみの地域づくり学校に通うようになって、これまではただの観光者であり、関係人口の一人でしかなく、自分が好きで行っていたミカンの花の香りを嗅ぐだけ、おいしいものを食べて、お土産買って満足し、その先にある人々の営みに気づく余裕がなく見過ごしてしまっていたことに気づきました。

地域は行政が作るものではなく、そこに住む人が、地域がまちを作っていくのだと。本当に、こんな素敵な講座、全新人行政マンが聞くべきやと思います。そしたら自分が何を求められてどんなまちづくりをそこに住む人たちと作り上げていくのだということが、意識できるでしょう。

今後の行動計画としては、自分のやりたいことを口にして、紙に書いて、整理して、どんどん形作れたらいいなと思っています。退職のリミットが迫ってきて、取り下げるのか、自分で決めて進めていくのかまだまだ迷っているけれど、ひとまず座学編皆勤でたくさんの地域や学生の方に出会い交流できたことを宝物として、次のステージ実践編に進みます。

これから始まる実践編でまた、私の意識が変化していくのかと思うと嬉しくドキドキする気持ちが大きくなっています。

主婦
奥田 郁子

紀美野町との出会いは今から 12 年前になります。友人から紹介され、別荘地を購入したことにあります。

豊かな自然のすばらしさと厳しさも痛感しましたが、主人の長年の夢を実現するために夫婦で移住し、4 年がすぎました。

「木工なごみ庵 和」を起業（家具・おもちゃ雑貨づくり）。福祉関係の仕事をしてきた私は、木工のワークショップ（子ども）、イベント販売等、主人の手助けをしたり、民泊協議会に加盟し、子ども達の宿泊の受入もするようになり、楽しく、生きがいにもなっています。

昨年からは、若い移住者との活動もスタートし、今後の生き方や方向性について学びたいと思い、今回の参加を決めました。

まずは、参加者の半分が若い学生さんである事にびっくりしました。田舎暮らしに感心をもたれ起業を考えておられる方、過疎化の進む自分のふるさとを何とかしていきたいと熱心に学び、向き合っておられる姿に刺激も受け、私もがんばりたいと背中を押された気がしました。

地方創生という言葉の意味もよくわかりませんでした。国や社会の流れが今までよりはわかるようになり、起業に対して、いろんな支援金があることも知りました。

自分の立ち位置が確認できた事は大きな収穫でした。

講義初日の木村社長のお話がとても心に残りました。地域づくりの活動が大切で、そのことが基となって地域の活性化につながり、株式会社として、起業されていること。地元で育った子どもが都会での学びをもち返り、ケーキ作りの職人さんとして活躍され、お客さんも増えているとのこと。すばらしいなあと思いました。

地域づくり協議会「秋津野塾」が地域にあるほぼ全ての団体を網羅する形で発足されたことはすごいと感じました。

地域で起業された方のお話を聞いた事はとてもうれしかったです。起業にいたる経過や思いなど、ゆっくりとお聞きする時間はなかなかもてないので、講義を聞き、関わりが深まった気がしました。気づきを与えられる言葉や共感できる思いもたくさんありました。今後の活動に生かしていきたいと思えます。

地域づくり学校開催にむけて、準備して下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

3年目となる今年の参加。

1年目は学生として、2年目は移住関連のNPO職員として、そして今年は宿泊と農業関連の事業を起業する立場として受講しました。

今年は、会社設立という実践の段階に入った年でもあり、これまで以上に「自分ごと」として学びを深めることができたように思います。

振り返ってみると、この3年間で大きく変化したのは「学ぶ視点」でした。

どの講義でも、「この内容は自分の事業にどう活かせるだろう?」「私ならこう取り組むかもしれない」と、常に自分の活動に置き換えて考えるようになり、多くのヒントをいただきました。

一例をあげてみますと、尾藤講師の講義を初めて受けた1年目は、「テロワール」や「ガストロノミー」という言葉すら耳慣れず、食の価値観が変化するという話にも驚くばかりでした。

2年目になると、テロワール・ガストロノミー・グリーン社会の流れを理解したうえで、「地域としてどう発信していくか」を意識し、全国の自治体に伝えていきたいという思いで講義を受けていました。

そして3年目の今年は、農業や宿泊という自分の事業と深くつながるテーマだったこともあり、SBNR (Spiritual But Not Religious) やエコツーリズムの話に強く共感しました。

自分が取り組もうとしている方向性が、世界的な価値観の変化と共鳴していることを実感し、今後こうした情報を常にアップデートしていく必要性を感じました。

「地域づくり学校」は、どの立場で参加しても、それぞれの視点から新たな学びを得られる場です。

毎年受講しても新しい発見があり、まさに“生きた学びの場”だと感じています。

また、大学生の方や同年代、そして人生の先輩方と夕食交流会でお話できる時間も楽しみのひとつで、毎年のように素敵な出会いに恵まれていることに感謝しています。

今回設立した「株式会社三喜遊 LF」も、もとを辿ればこの地域づくり学校があったからこそ生まれたものです。

ここで出会った仲間、そして地域でお世話になっている方と共に形にできたことは、私にとって大きな財産です。

さらに、今年度「わかやま地域課題解決型起業支援補助金」に採択していただけたのも、講師として登壇された岡先生や阪井先生から多くのアドバイスを頂けたおかげだと感じています。

3年を経て、改めて「地域づくり学校」が私の人生に与えてくれた影響の大きさを実感しています。

今年は起業準備の関係で参加できなかった講義もありましたが、来年はまたリベンジ参加したいと思います。

今年も多くの学びと出会いを、本当にありがとうございました。

○参加した理由

私が「令和7年度きみの地域づくり学校座学編」に参加した理由は2つあります。1つはこれまで紀美野町を訪れたことがなかったこと、そして2つ目は農山村でのなりわいづくりについて学ぶためです。以後、紀美野町を訪れた感想と座学編を通して得た学びを記述します。

○紀美野町を訪れた感想

私は現在田辺市在住ですが、和歌山県新宮市出身です。その後大学進学に伴い和歌山県を離れ、今は田辺市で地域おこし協力隊として活動しています。

しかし、これまで長く和歌山県で生活していましたが、紀美野町には訪れたことがありませんでした。そのため受講をきっかけに紀美野町に行ってみたいと考えました。

そして今回、紀美野町を訪れ、座学編前にまち歩きをしてみたり、講座を受講した上での紀美野町の印象は「豊かな自然と多様な人に溢れる町」でした。まち歩きは限られた範囲でしか出来ておりませんが、周りは山や川などの自然に囲まれており農山村の魅力を感じました。また、紀美野町で活動されている事業者の講座を通じて、この町で活動されている魅力的な事業者が多くいらっしゃることも知り、とても良い町だと思いました。

○座学編を通して得た学び

座学編では大学等の有識者や和歌山県外の事業者、そして紀美野町事業者の方々による講座を通して多くのことを学びました。その中から特に印象に残った2つの学びを記述します。

1つは農山村の現状や課題についてです。座学編ではデータや事例を通じて農山村の現状や課題を学びました。その中で印象的だったのは、講座の中で出てきた「誇りの空洞化」という言葉です。「誇りの空洞化」は「人・土地・ムラの空洞化」という3つの空洞化の背景で起こるもう1つの空洞化です。例えば実家の親から「地元に戻ってこなくていい」と言われたりすることで「地元には何もない」という風に考えるようになり、地元へ愛着を持ちづらい環境になってしまうというものでした。私自身も同じ地元出身の友人からも「地元には何もない」と聞くことがあるため実に腑に落ちるものでした。「誇りの空洞化」を止めるためにどうすべきなのか、これは多くの地域にとって共通の課題だと感じました。

2つ目は紀美野町で活躍する事業者についてです。座学編では様々な背景や経験を持つ事業者のお話を聞くことが出来ました。お話の中から様々な学びがありましたが、その中で私が感じたことは地域で活躍される事業者の存在がどれだけ町にとって大切なものかということでした。地域で事業者が増えれば経済面から地域の活力になるかと思えます。しかしそれだけでなく、町で活躍する事業者の存在というものは、将来町で暮らしたい若者にとってロールモデルとなる存在という点でとても大切だと感じました。

この2点以外にも多くのことをきみの地域づくり学校で学ぶことが出来ました。得た学びを忘れずに私自身も今後の活動に取り組んでいきます。

本年度もきみの地域づくり学校座学編は第1講から第15講まですべて受講させていただきました。その中で紀美野町へ移住された方々の講義がたいへん参考になりました。

第3講（北峯山杣庵(ごつあん)(有)玉一商会代表取締役 玉置 敏明 氏）では人との出会いを大切にしないといけないと思いました。ストーリー性が必要なことを認識できました。有事の際に役立ち情報共有できるラジオや、薪割りやかまどでご飯を炊いたりする体験が子供たちへの教育になっていることなど納得しました。これからの民泊経営ではインバウンドも受け入れていくとのことでもまた新しいストーリーが期待できると思います。

第6講（きみのたから焙煎体験カフェきたの 尾上 泰江 氏）では人生というものを真剣に考えてみる事ができました。自分の納得で進むようにしていきたいと思ひますし、好きなことや大事にしていることを、勇気をもって「かたち」にしていきたいと思ひます。そして時間に追われることなくゆったりとした時間が流れて、できないときはそのまましばらく放置してタイミングがくるまで熟成するくらいの余裕を持ちたいと思ひます。紀美野町の時間の流れに身を任せれば楽しい移住生活ができそうだと思います。

第9講（南果樹園 園主 南 秀和 氏）ではぶどう山椒のお話を聴くことができ、紀美野町はすでに産地になっていますがまだまだこれから先も有望だと思ひました。計画をつくる・実行する・観察する・記録するを繰り返す10年日記は実践してみたいと思ひます。またスマート農業もこれからやってみたいと思ひます。温暖化や鳥獣害対策など農業の変化を実際に感じてみたいと思ひます。

第12講（アンフィ合同会社 代表 佐々木 彰央 氏）ではDX化によって紀美野町でもグローバルな製造業務ができることを知りました。他機関と連携することでB to G、B to B、B to Cも繋がっていることも理解できました。CSR活動にも力を入れられており、これからの楽しみです。紀美野町でもいろいろな事業ができるということでたいへん力強いと思ひます。

第15講（Kimino-Labo 代表 中野 卓 氏）では移住までの流れと仕事との関連を知ることができました。Kimino-Laboの収入の内訳はこれから変化していくと思ひます。紀美野町内の耕作放棄地は増えていくと予想されていますが、このような複業によって耕作放棄地が有効に活用されていけば素晴らしいと思ひます。私も半林半X、多業することを目標にしていますので、多業スケジュールのやり方を学んでいきたいと思ひます。

座学編のカリキュラムにより講師の方々が発験されたリアルなお話をたくさん聴くことができました。これら企画・運営された皆さまに深く感謝申し上げます。これから実践編を受講し紀美野町での「なりわい」を見つけたいと思ひます。

今年で3回目の受講となったきみの地域づくり学校。全5回15コマのうち、今年は都合により最後の1日を受講することはできなかったが、受講した12コマの講義を通して、様々なことを学ぶことができた。各回で得た学びは次のとおりである。

第1回の講義では、都市農村交流とコミュニティビジネスについて学んだ。藤田講師からは、都市と農村の関わり方の変化について教わり、体験教育旅行やワーキングホリデーで農家民泊が広がっていること、それが関係人口づくりの土台となっていることを学んだ。木村講師からは、地域づくりを持続させるには、住民主体の内発的な地域づくりが重要であることを田辺市秋津野における地域づくり事例から学んだ。玉置講師からは、FMラジオ局や民泊運営について話を聞くことができた。

第2回の講義では、食産業の新たな可能性と起業というテーマで学んだ。尾藤講師からは、国際的な食の価値の変化について学んだ。特にnomaの昆虫食の話や、ヨーロッパで農業は環境汚染産業であるという話は、衝撃的だった。岡講師からは、世界各地の地域に根ざしたビジネスや地域再生の事例から、紀美野町の活性化のヒントを得る着眼点について学んだ。今回は、ワールドワイドな話を中心だったが、講師が所属するわかやま産業振興財団における起業支援の話も是非聞きたいと感じた。尾上講師からは、移住から創業までのストーリーを聞くことができた。講師とは、初年度のきみの地域づくり学校で交流し、移住及び創業の夢を聞いていたが、それを実現した行動力に学ぶところは大きいと感じた。

第3回の講義では、地域資源を活用した農業の新たな展開について学んだ。岸上講師からは、農林業センサスや農林水産省の資料をもとに、日本の農業と農村の変化について学んだ。道の駅お茶の京都みなみやましろ村の駅長である森本講師からは、道の駅の立ち上げから、村茶のブランディングについて詳しく話を聞くことができた。道の駅お茶の京都みなみやましろ村には、視察に行ったこともあり、森本講師から話を聞くのは初めてではないが、村役場の職員から道の駅の駅長になったという話は、何回聞いても驚かされる。また、一貫した村茶のブランディングについても、あくまで村茶がメインであり、道の駅をその製造と販売の場として機能させていることも、道の駅成功の要因だと感じた。南講師からは、和歌山で栽培される柑橘類やぶどう山椒の栽培について学んだ。講師が持参された山椒わらび餅を食したが、甘い菓子にも山椒が合うというのは新発見であり、山椒の可能性に驚いた。

第4回の講義では、地域づくりに必要な人材育成というテーマで学んだ。牧野講師からは、連携力重視型人材の重要性とその育成について学んだ。講師が市長を務めた飯田市では、高校教育に地域人教育を取り入れているという話を聞き、高校における人材育成の重要性を知った。紀美野町においては、多くの高校生が町外の学校に通っており、どのように地域人教育を行うかが課題だと感じた。日下講師からは、パソナグループの取り組みについて、淡路島における雇用創出の話を聞くことができた。パソナによる地域貢献は素晴らしいことではあるが、巨大企業が来ることによる地域の活性化という印象が強く、企業誘致の困難性と企業撤退後の地域衰退リスクを考えずにはいられなかった。佐々木講師からは、3D模型の制作について話を聞いたが、講師の生物好きが熱く伝わってきて、とても興味深く話を聞くことができた。

以上が、令和7年度きみの地域づくり学校の各回の講義で特に得た学びである。

1. 受講全体の感想

昨年度に引き続き 2 回目の受講となり、昨年度も講師として登壇されていた方の講義を再度お聞きすることができ、昨年度とは異なる感覚で学ぶことができました。特に、各回 1 コマ目の大学の先生の講義に関しては、各テーマの国内や海外の動向や歴史について、なかなか普段お聞きすることが出来ない内容を復習のような形でお聞きすることができ、前回より深く学ぶことが出来たように思います。

さらに、今年度まちづくり課に異動になり、日々紀美野町のまちづくりに関わらせていただきながら業務にあたっていたことも、講義を受けて感じる事が変化した大きな要因と感じました。

その中で、私が特に勉強になったと感じたのは、まちづくり課で仕事をしているからということもあり、各回の 3 コマ目の紀美野町で活動されている方の講義でした。町内で様々な活動をされている方のため、行政職員としてその方々が現在どのようなことをされているかについては、部分的に知っていましたが、これまでのご経験や現在の活動の原動力となる部分などは初めてお聞きできた機会となりました。これまでの道のりをお聞きし、目標達成・自己実現のために、「しなければいけない」と思っていることが、必ずしも「しなければいけない」ことかどうかは物の見方で変わることを学べたように思います。まちづくりに限らずですが、物事を長く続けていくために、固定観念を疑い、広く視野を持つ努力をしていこうと思います。

2. リスキリングの観点から

学びなおしという点でも、上述の固定観念を疑い、広く視野を持つということは重要だと感じました。行政機関で働く中で、行政ができることやすべきこと、職員としてすべきことなどが徐々に確立されていくものであり、行政機関についての理解が深まるという点では、そのこと自体が良くないことはありませんが、それにとらわれるのではなく常に第 2、第 3 の案も考える、新しい意見を受け入れることができる職員でありたいと感じました。また、それに気付けたことで、上司など身近な方の考え方の柔軟さにも気付き、今後も行政職員として働く中での新たな目標を持つことができたことが大きな学びでした。

また、講義を通してのみでなく、講義後の質疑応答での質問内容や、交流会で社会人、学生など様々な立場の方と話をさせていただき、様々なことに興味を持つこと、知ろうとすることを心掛けたいと影響を受けました。

3. まとめ

今年度で 3 回目を迎えるきみの地域づくり学校に参加させていただき、各講義の受講ではもちろんですが、交流会などそれ以外の部分でも学びや考え方をアップデートする機会を得ることができ、受講してよかったと感じています。今後の業務や自身の自己実現にこの学びを活かせるようにしていきたいです。

最後になりましたが、講義をしてくださった講師の皆さま、新たな学びを得るきっかけをくださった受講生の皆さま、地域づくり学校関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

まず、私がきみの地域づくり学校に参加した動機は、大学や地域づくり学校で学んだ知識を基に実践の場においてどの立ち位置でどのように貢献できるか、地域課題解決や活性化の手法を見出せるようになりたいと考えているためである。私は三重県南部の過疎地域で生まれ育ち、当たり前と思っていた暮らしや普段見慣れている景色に人を呼び込む魅力があると気づいたことで、地域づくりや地域資源開発に関心を持った。しかし、過疎地域で育ったがために視野の狭さや柔軟性に欠ける自身の課題を認識しているため、講義や交流会を通じて知見を広げ、得た知識や実践力を地元や紀美野町に還元したいと考えている。

今年度は15コマ全講義に出席し、特に牧野講師の連携力重視型人材の講義が印象に残った。この講義では、高校までの地域人教育や地域課題を解決するための人的ネットワーク構築力と巻き込み力の重要性を学んだ。持続可能な地域づくりを進める際に、住民が主体となって課題解決や活性化の手法を見出す必要があるが、現代人は主体性に欠け、地域が困難に直面したとしても他人任せの心理が働いてしまう。したがって、住民が地域づくりに主体的に参画できるような動機づけが必要と考える。地域には様々な得意分野を持つ多様な人材が存在するため、個々の専門性を発揮できる場を設けることでモチベーション向上が期待でき、自分事として地域と関わり皆で課題を解決する協働の循環が自信や生き甲斐に繋がる他、住民の地域に対する愛着・誇り・地域を次世代に繋ぐ使命感を育むことができるのではないかと。しかし、地域に対する住民の思いは多様であるが故に合意形成は簡単ではない。そこで、多様な考えを持つ人々の存在を理解し相手の価値観を尊重する姿勢や、少数派意見を出しやすい雰囲気づくり、対等関係の合意形成が重要と考える。地域づくりに関わる多様な主体の力関係は等しくないが、同じ立場で議論を重ねそれぞれが自覚と責任を持って主体的に協働に取り組むことで個人の特性を存分に発揮できるのではないかと。

近年は個人の価値観や生活様式の多様化が進む一方で、人間関係の希薄化や地域コミュニティの衰退に拍車がかかり、共助や人々の繋がり的重要性が謳われるようになった。そのため、住民一人一人が地域の未来を決める権利と責任があるという意識を持ち、次世代に地域を残すために地域との積極的な関わりが今後は求められると考える。そして、当たり前すぎて気づかない地域の素晴らしさや大切な面を普段と異なる角度から見つめ直すことで新たな発見や気づきを得ることができ、地域資源を活用した地域づくりに繋がると考える。

最後に、講義を通して地域づくりの理論に加え、紀美野町との運命的な出会いや失敗談など貴重な体験談を聞き、多くの学びと刺激を得ることができた。今後は身に着けた力や知識を地域のために役立てられるよう、ご縁をいただいた地域との積極的な関わりを大切にしたいと思う。

私が「きみの地域づくり学校」に参加した理由は二つある。一つは、ここで農業や地域づくりについて学ぶことができると考えたからである。もう一つは、実際に紀美野町を訪れることで自身も関係人口として地域に関わることができると思ったからである。実際、きみの地域づくり学校ではたくさんの学びを得ることができ、自身の成長に繋がったと感じている。

私は第1、2、3、5回の座学編に参加し、それぞれの回で多くの学びがあった。まず第一回では、農村における課題や希望、地域づくりの歴史や経験などを知ることが出来た。農村に関しては、以前から問題視されている人口減少などの深刻な問題はあるが、農村に対して癒しや田舎体験を求める人々が増加するなど新たな価値が見いだされつつあるということを知った。このような視点から、農村と観光を組み合わせることで地域が活性化し、魅力向上にも繋がるのではないかと考えた。地域づくりに関しては、地域住民が団結して一つの目標に進むことの大切さや、地域住民同士のコミュニティによって持続可能になるということを知った。それを受けて、自分自身は地域の一員として何ができるだろうか、自身の地域の現状はどうなっているのかなど、自身が暮らす地域について考えるようになった。次に第二回では、食における課題や農業との関わり、移住のストーリーなどについて知ることが出来た。食に関しては、食に対する価値観が世界と日本で異なるという事実や、その土地らしい食材を使った食事に価値が見いだされつつあるということを知った。こうした学びから、普段の買い物で食材の産地を気にするようになったり、旅行では地元の食材を使用した食事を選んだりするようになった。移住に関しては、東京での悶々とした生活から紀美野町での自由な生活に至るまでのお話を伺い、移住の魅力や可能性を感じることが出来た。そして第三回では、データを用いた農業の現状や農業の振興と地域づくりの関係、地域の名産であるお茶をコンセプトにした道の駅の運営について知ることが出来た。特に道の駅についてのお話は興味深いものであり、地域づくりの観光要素として注目される道の駅がどのように構成されているのか、どうすれば地域に寄り添いながら経営を成立させられるのかなど様々なヒントを得ることが出来た。農業に関しては、実際に農家として長年働き続けてきた経験を拝聴したことで、農業ではいかに農作物に向き合って作業を行うか、それをいかに継続していくかが大切であるということを知った。最後に第五回では、地域に対する誇りの重要性や地域再生の実例、和歌山県内の移住者の実例、紀美野町へ移住後の複業という生活などについて知ることが出来た。地域再生の二つの実例から、地域再生には「自分たちの地域を自分たちで良くしたい」という地域住民の意識が重要であるという共通点に気づいた。複業に関しては、世の中にある多くの職業の中から必ず一つの職業を選ばなければならないと考えていた私にとっては衝撃的な働き方であった。また、移住したことで自分のやりたいことができるようになったというお話を拝聴し、その自由さこそが紀美野町に移住することの最大の魅力ではないと感じた。

全体を振り返ってみると、私はきみの地域づくり学校で農業や地域づくりについて学びたいと考えていたが、ここではそれ以上のことを学ぶことができたと感じている。特に、毎回講義に参加するごとに新しい出会いがあり、コミュニケーションを取る楽しさや大切さを学ぶことが出来た。ここでの学びを活かして、将来は地域に携わることが出来れば良いと思う。

私は昨年度に引き続ききみの地域づくり学校に参加した。一昨年度に受講した秋津野ガルテンでの講義「地域づくりの理論と実践」を含めると地域へ出て学ぶ機会は3年目であり、継続的な参加や外で学ぶことの重要性は回数を重ねるごとに感じるばかりである。

今年度受講した中で、私は「地域での人とのつながり」というところで学びが大きかったように感じる。食糧供給・豊かな生態系の保全などのさまざまな機能を持つ農山村の再生・維持は必要不可欠であり、特にクマによる人的被害が相次いでいる今日においてはその重要性が高まっているように感じる。農山村の機能を維持していくためには、日本全体として少子化・高齢化が進行している現状において、第1講の藤田先生や第14講の阪井先生の講義タイトルとしても挙げられている関係人口のような地域外の人とのつながりを持って刺激を受けながら、地域に対して愛着のある人による内発的な課題解決への働きかけ・価値創造というのが重要だと考えられる。このような地域に関わる人というところで、私は第10講の牧野先生による講義が特に印象に残っている。地域の課題に対して自分事として捉えて、課題解決の中で自分にできること・できないことを分析して、できないことは人と協働しながら解決へと向かう「連携力」を学び、人とのつながりの重要性を感じた。それは、グループワークにおいて、外部からの必要な人材に関わってもらうためにはどのようなことをするのかというのについて、外から招聘するということの一般的な過程を全然知らない自分としてはとても想像しにくいところであったが、話し合うことでイメージが膨らんできた部分もあり、そのようなところで連携力の重要性が実感できたようにも思う。また、必要な人材を外部から呼び込む際に決め手となるのが人たらしという話の中でも、結局人とのつながりが重要だと感じられた。地域での学びの機会が3年目となり、自分も徐々に顔や名前を覚えてもらうことがわずかながら増えてきた中で、人とのつながりの意義をより実感する。

地域に出て多様な人々と関わりを持ちながら学ぶ機会は貴重であり、参加するたびに新たな発見がある。きみの地域づくり学校が今後も続くのであれば、継続して参加していきたいと感じる。

1. 初めに

もともと紀美野町には特にゆかりがなく、「空き家率が全国でも上位」という話を授業で聞いたことがある程度だった。そのため、最初は高齢者ばかりが暮らす、いわゆる「消滅可能性都市」のような過疎の進んだ町を想像していた。しかし、実際に「きみの地域づくり学校」に参加し現地を訪れ、地域で暮らす人々や町の将来を真剣に考える方々の声に触れたことで、資料や講義だけでは知り得なかった紀美野町の現状や魅力、そして地域づくりの新しい形を学ぶことができた。本レポートでは、その学びを振り返り、今後どのように生かしていくかを考察する。

2. きみの地域づくり学校での学び

9回にわたる講義を通して、大きく2つの学びがあった。

1つ目は「地域の価値の創出」についてである。第1講では、都市住民を受け入れる農村側の動きや、外部の人との交流によって地域の人々が自らのふるさとに誇りを取り戻す「鏡効果」について学んだ。農村地域には外部の人が入りづらい独自のコミュニティがあるというイメージを持っていたため、こうした交流の取り組みがあることに驚いた。特に紀美野町は移住者の受け入れに積極的で、移住後の生活サポートにも早くから力を入れていると知り、印象に残った。

第6講で実際に紀美野町に移住した尾上さんが、「電車がいないため時間に追われる感覚がなくなっ」と話されていたことが心に残った。この言葉は、都市生活を経験した人だからこそ感じられる紀美野町の魅力であり、地域の中では不便とみなされていたものが価値に転じた好例だと感じた。移住者や関係人口の増加によって、地域外の視点が新たな価値の発見につながるということも学んだ。

一方で、地域再生の難しさについても学んだ。第2講では、新住民と旧住民の生活スタイルの違いによってトラブルが生じることがあるという話があった。環境や文化が異なるため、互いにギャップを感じるのは当然である。だからこそ、まずは「知る」ことから始め、互いを理解することが大切だと思った。そのためには、暮らしの相談ができるコミュニティを整えたり、いきなり移住を促すのではなく、関係人口として地域に関わる機会をつくったりすることが重要である。地域づくりには、こうした取り組みを支える行政や地域おこし協力隊の存在が欠かせないと実感した。

3. 今後について

これらの学びを通して、私は自分の地元や将来の進路についても考えるようになった。私の地元はニュータウンで、現在はまだ子どもも多いが、今後急速に高齢化が進む可能性がある。将来的には紀美野町のように移住者や関係人口に頼るまちづくりが必要になるかもしれない。私は行政への進路も視野に入れているため、今回学んだ「地域の価値の創出」や「関係人口の重要性」といった視点を、今後のまちづくりの中で生かしていきたいと考えている。

きみの地域づくり学校への参加を通して、私は紀美野町の関係人口の1人となった。和歌山大学では紀美野町の空き家を調査する先生がいたりとたびたび授業に紀美野町が登場する。きみの地域づくり学校に参加してから人ごとのようには思えず、そういった話題によく耳を向け考えるようになった。今後

も紀美野町とのつながりを大切にし、継続的に関わっていきたい。

4. 終わりに

きみの地域づくり学校に参加し、講義からだけでなく受講生との交流からもたくさんの刺激を受けた。今後も紀美野町と関わり続け、共に成長していける関係を築いていきたい。きみの地域づくり学校で学びの輪が広がり、町がますます繁栄することを願っている。

今回大学のお知らせでこの活動を知り、経営の視点や町づくりをされている人のお話から町づくりについて理解を深めることを目的として参加した。

「きみのたから」の尾上泰江さんから聞いた中で、幸せのために働いているけれど幸せにはなれなかった。というのが特に印象深かった。これを聞き、仕事はお金を稼ぎ出世することだけが大切なことではなく、むしろこれが人生を楽しめないものにするのではないかと考えた。これから自分が仕事をする年齢になった時はお金のためだけに働くのではなく、自分の心が惹かれる選択をして仕事だけの人生にはしたくないと考えた。

「道の駅」の森本健次さんの話からは、前任の想いを残し、後世に残す。そのために役割分担をして地域の名を広めるために自分が担当することを考える。という、一人一人が地域の名を広めるために行うことが大事であると知ることができた。

これまで、地域づくりというと観光事業により力を入れることや、まちおこしイベントのような大きなものを想像していたが、きみの地域づくり学校に参加したことで、町づくりというのは日常の小さな積み重ねや一人一人が自分の役割を考えて行動することも地域づくりにつながっていることが分かった。特に、講義を通して仕事というのはただお金を稼ぐことだけを目的にしていると本来の目的を見逃してしまうことが印象に残っている。たくさんの方の地域づくりについての講義を聞いたうえで、お金を稼ぐために地域おこしをした方はいないように感じ、そもそもお金を稼ぐに地域づくりを行う方はいないと考えた。これにより、きみの地域づくり学校で講義をしてくださった皆さんからは疲労よりもワクワクしていると感じた。これは自分の心が惹かれる選択をし、また自分の仕事に誇りをもっているからであると考えた。このような人たちが地域おこしをすることで、実際に地域は活性化し、また世に地域の知名度が広まっていくのではないかと考えた。参加する前は地域づくりの取り組みにしか興味をもっていなかったが、そもそもの気持ちの持ちようが地域づくりには必要不可欠であることが分かった。

今回のきみの地域づくり学校に参加したことで、地域づくりは人との関わりの中で成立するものであるとわかった。その地域の生き物や特産物、自然や伝統工業、そしてこれらを愛している人が地域づくりに必要な条件であると考えた。将来、自分が地域づくりに深く関わるか否かに関係なく、日常の小さな関わりや人とのかかわりを大事にしてどれだけ地域に関わっていくかが大切であると考えた。地域づくりは大きなイベントを行うことや観光プロジェクトを立ち上げることだけではないことが分かった。きみの地域づくり学校を通して学んだことから地域づくりに生かすことができるものと考えていきたいと思う。

1. はじめに

まず、私はこのきみの地域づくり学校に初めて参加させていただき、第1講～第15講と、中田の棚田のフィールドワークに受講させていただきました。この学校を知ったきっかけは、ゼミの先生がゼミの授業内で紹介してくれたことがきっかけです。

2. 参加動機

私がこの学校に参加した理由は、将来の夢が、地元の市役所で働くことだからです。その夢を持った理由として、高校を地元から少し離れたところに進学したことにより、それぞれの地域の魅力を感じるようになりました。そこから、「まちを活性化させたい」「魅力を伝えたい」と考えるようになったのが理由です。そして、この学校に参加することで、地域づくりのヒントや刺激をもらいたいと思い参加させていただきました。

3. 受講した感想

感想として、大きく分けて3つあります。

まず、一つ目は、「関係人口」についてです。このワードは大学生になってから、初めて聞いた言葉でありましたが、講義を受けていく中で、地域を活性化していくためには欠かせない存在であるなど感じました。日本で人口減少が問題となっているなか、地域でも少子化や高齢化が問題になっています。その中で、「関係人口」の存在は、地域経済の効果、地域コミュニティの発達、文化や歴史の継承などが期待でき、私自身も今後、関係人口の一人として、今まで関わってきた地域にどう関わろうか考えようと思います。

そして、二つ目は、「若者」についてです。講義の中で、「若者」というワードを聞くたびに「私だ!」と反応してしまい、地域にとって、今の若者が地域にどう働きかけてくれるのかが期待されているのだなと感じました。第一回の藤田校長の講義で、「今の若者に期待していることは何か」と質問させていただいたところ、「忖度しないことが大事」と答えていただき、学生は失敗を恐れず、自分の意見をどんどん述べるのが大事だと学ばせていただきました。

最後に、「中田の棚田」についてです。短い時間ではありましたが、フィールドワークに行かせていただき、貴重な話を聞かせていただきました。その中で、感じたこととして、人手不足や後継者不足で棚田の景観が薄れていくことは決してしてはいけないということ、つまり、持続可能な棚田にすることが大事だと感じました。景観を守ることの難しさや水の管理の大変さ、収穫の大変さなど直接私の目で見えてきて感じました。問題点として、インフラが整っていないこと、農業機械に詳しい人がいない、広報の仕方など、まだまだ解決すべきことがありました。このような体験やお話をお聞きして、私自身、いつになるかは未定ですが、いつか棚サポになろうかなとも考えています。実践編の方も参加したかったのですが、距離的な問題などもあり、今年は見送らせていただきましたが、ぜひ、来年は参加させていただきたいです。

4. 私のこれから

全5回の講演会とフィールドワークを経て、今後やりたいことができました。それは、農業です。地域づくりを主に勉強するつもりでしたが、新たにあまり関心がなかった農業に関心が湧きました。特に、フィールドワークに参加したことで、農業の楽しさや大切さを学ぶことができ、農業に関わってみたいと思うようになりました。

5. まとめ

人生のなかで初めてこのような活動に参加させていただき、とてもいい勉強になりました。とにかく参加者のみなさまがあたたかくまじめに勉強されている姿に学生である私ももっと頑張らないといけないと感じました。また、紀美野町の方や他大学の学生さんなど様々な方々とお話することもでき、楽しく参加させてもらいました。来年もぜひ、予定が合えば参加しようと考えています。学校を運営してくれた方、支えてくれた方ありがとうございました。

私がきみの地域づくり学校の座学編で学んだこととして、主に何かしらの事業を展開しておられる方の話を聞いていると、はじめは何もない、何も分からないゼロの状態から事業をスタートさせ、そこからさまざまな工夫を凝らしながら、失敗も経験しながら、時間をかけて、現在の状態になり、地域づくり学校でお話できるようになっておられているという物語がすごく印象に残りました。また、そのような方々が言っておられていたことが、「人生は一度きりであるからやりたいことをやった方がいい」とおっしゃられており、実際にその言葉を体現して成功しておられる方の言葉であったため、すごく説得力があり、自分自身に刺さったなと感じました。そのやりたいことを「成功」させるためには時間が必要で、決してあきらめない継続力が大切になると話を聞き印象に残りました。特に、今年度の第1回目地域づくり学校の秋津野ガルテン木村さんのお話では、地域住民の方々との衝突や直売所での課題などのたくさん問題が出ていましたが、地域住民の方々の合意も得ながら、今の秋津野ガルテンまで作り上げられた話がとても印象に残っています。それと同時に地域づくりというものを少しでも肌で感じる事ができた気がしました。

そして講義後の食事会では、自分自身よりも年齢が上の方とコミュニケーションを取る機会が多々あり、普通に生活しているだけでは聞けない話や、前で立って話されている方の話を聞いていると、みなさんいろいろな興味関心があり、私が3回生であるため、将来についてもっと考えないといけないなど刺激を受ける機会になりました。

今年度が初めての地域づくり学校への参加となり、和歌山県、特に紀美野町についてはほとんど知らなかったですが、地域の街並みや取り組みなどを含め、とても素晴らしく、さまざまな取り組みを行われている地域だなと感じました。きみの地域づくり学校を機に新たなことを知るきっかけとなり非常に良い経験となりました。

きみの地域づくり学校で一番印象に残った講義は木村氏の「地域づくりからコミュニティビジネスへ」であった。講義では、田辺市上秋津地区において昭和30年代以降地域資源を活かしながら住民主体で地域づくりを重ねてきた流れと、その過程からコミュニティビジネスへ移行した経験が語られた。ここではその内容を整理するとともに、学生としての視点から学びと課題をまとめたい。

講義の中で木村氏は、まず「地域づくり」という言葉の意味を振り返った。単なる地域振興や観光客誘致ではなく、地域に住む人が自ら主体的に“暮らし・産業・交流”を編んでいく営みであると強調された。講義資料によれば、上秋津では昭和30年代から地域づくりの組織・法人を立ち上げ、段階的に体制を整えてきたということが紹介されていた。その上で、(株)秋津野が「コミュニティビジネス」という形でどのように成長してきたかという流れがポイントとして語られた。住民出資型の会社設立、農業者を核心に据えた運営、地域資源（果樹・旧校舎等）を活かした交流施設・直売所の展開などが挙げられる。講義では「住民が利害関係者として意見を出せる構造づくり」が特に重要だと述べられ、これが地域の“やらされ感”を減らし、自走する力を育てたという。さらに、「転機」についても言及があり、単一の農業モデルではなく、観光・交流・加工・宿泊といった複数の収益軸を持つことが、地域変化への対応力を高めたというエピソードが共有された。また、講義を通して、木村氏は「人を巻き込むこと」の重要性を何度も強調していた。地域内の農家・移住者・行政・NPO・都市住民といった多様な立場をつなぎ、「面白そう」と思ってもらえる価値を創ることが、外部からの関係人口や観光者を引き寄せ、結果として地域の“場”が育つという視点が印象的だった。

木村氏の話聴講し、「住民主体」と「地域資源活用」という言葉の裏にある“時間のかかる取り組み”が改めて浮かび上がった。例えば、住民出資の法人設立や役員構成の調整、そして農家が主体として参画できる仕組みづくりなどは、一朝一夕では成り立たない。実際、上秋津では昭和から今日に至るまで段階を踏んできたという過去がある。また、講義の中で「転機をどう捉えるか」という問いがあり、私はそこに“地域変化をチャンスと捉えるマインド”の重要性を感じた。たとえば農業だけでなく、交流施設・宿泊・直売・加工といった複数の事業軸を持つことで、人口減少や農業収益低下といった逆風を受け流す力が生まれる。これは学びとして、地域づくりにかかわる際、課題を“変化の前兆”として捉える視点が重要だと改めて思った。一方で、課題も浮かび上がった。講義では「人を巻き込む」ことが強調されたが、実際には住民間の価値観・意識・背景が多様であり、意見調整や利害調整は容易ではない。学生として、地域外・都市部の価値観を持つメンバー（移住者・観光者等）が参加する際、「地域らしさ」と「新しい価値観」のバランスをどう取るかが鍵になると感じた。また、地域をビジネスとして成立させ続けるためには、収益構造の健全化・持続化が不可欠である点も重要だと思った。

木村氏の講義を経て、私自身が地域づくりに関心をもつ学生として、「地域資源を再発見する視点」「住民と対話する姿勢」「変化をチャンスに変えるマインドセット」を学びたいと思った。特に、都市部から地域へ関わろうとする際、地域住民の立場・歴史・価値観を理解した上で協働を模索することが必要だと感じる。木村氏が示したように、地域づくりは「短期の成果」ではなく「長く続く場づくり」であり、学生として今からその視点を育むことが意義あると考える。木村則夫氏と(株)秋津野の上秋津における実践は、地域づくりを単なる行政施策や観光振興ではなく、住民主体のコミュニティビジネスと

して構築してきた点で、私にとって非常に示唆深かった。今後は秋津野を例に他の地域の学びも深めていきたい。

私は、藤田先生の勧めで、きみの地域づくり学校に参加しました。4日間の講義に加え棚田のフィールドワークにも参加しました。地域に出向いて実践者や大学の先生のお話を聞くという機会は初めてで、参加前はかなり緊張していました。そして、講義が始まると、参加者と講師の熱意が伝わってきて、より気持ちが引き締まりました。また、講義後の夕食交流会では、初対面の大人と話をするという機会が普段ないため、積極的に話せないときもあったのですが、ご自身の活動についてのお話を聞かせていただいたり、今後についての相談に乗っていただいたりし、楽しく、そしてとても貴重な時間でした。

第1回講義では、都市と農村の関係が「対立」から「交流・連携・協働」へと変化しており、体験教育旅行や農家民泊などにより「鏡効果」が期待できるということを学び、きみの地域づくり学校を受講するにあたっての予備知識を得ることができました。そして、住民の理解と協力が地域課題解決への最も大きな原動力で、地域づくりを行うことが外から人を呼び込むことにつながるということを学び、秋津野ガルテンの成功はほかの地域にも大きな影響を与えるものだと改めて感じました。最後に、民泊などの経営により紀美野町ならではの魅力を様々な体験を通して感じることはすごく魅力的だと思いました。

第2回講義では、今日の日本では、お金を稼ぐことより豊かな暮らしをすることが求められるようになり、様々な分野で変化が起きているということを知りました。また、移住者の視点から、紀美野町の魅力や課題を踏まえて、心の豊かさに重きを置いて暮らすことのできる環境だと知り、そのような環境がこれからの日本に必要なのだと改めて理解しました。

第3回講義では、経済とは、効率的にお金を循環させるということでお金を稼ぐということではないということ、政策的には実績ではなく農業振興などの地域づくりへ進むことの重要性を学びました。また、森本先生の講義で、道の駅でPB商品をつくって販路拡大をされたお話を聞き、農家が自分たちの道の駅だと感じるほど地域に寄り添った存在で、かつ遠方からも多くの人を訪れているという状況は、道の駅が双方にとって重要な交流の場や生きがいになっていることをよく表していると感じました。そして南先生の講義では、農業のリアルを学ぶことができ、よく考えて日々の作業を継続していく必要があると知り、農業の可能性に今まで以上に興味がわきました。

第5回講義では、地域で起こっている過疎と都市から移住に向けた支援の変化を整理することができました。「誇りの空洞化」が進行する中で、農山村に向かう若者たちや、地域のために何かしたいと考えている地域の人と一緒にプロジェクトを始めるというのは、地域内外の需要を活かしたこれからの日本に必要な取り組みだと感じ、私も自分の地域を見つめなおすきっかけになりました。また、地域内外の多様な人の交流の場が生まれることで創出される「にぎやかな過疎」という言葉もとても興味深かったです。そして、やはり地域と訪問者をつなぐきっかけを地域で作ることの効果と重要性を再認識しました。

地域で活躍されている方々のお話を聴き、棚田のフィールドワークに参加し、交流することで、授業で聞いていただけのころよりも間違いなく積極的に地域活性化に対して考え始めました。そして今後も、このような機会があれば参加し、より深く自分なりに考えられるようになりたいです。

授業を通して、地域づくりとは単に「地域を便利にする」ことではなく、地域に住む人々が主体となり、地域の課題解決や魅力向上に取り組むプロセスであると学んだ。行政に頼るだけではなく、住民や企業、学校などさまざまな主体が関わり、協力しながら進めていく点が特徴である。

地域づくりは、地域内の課題や資源を知ることから始まる。授業では、地域を歩いて観察することの重要性や、住民の声を聞くことの大切さを学んだ。また、課題は問題として見えるものだけでなく、人口減少やコミュニティの希薄化など、目に見えにくい課題にも目を向ける必要があると感じた。地域には子どもから高齢者までさまざまな世代や立場の人がいる。したがって、地域づくりは1つのグループだけで考えるのではなく、多様な視点を取り入れることが重要だと学んだ。また、個人で取り組むよりも、チームで役割分担をしながら計画を進めることが成功につながると感じた。

アイデアを考えることはできても、実際に行動に移すことは難しい。しかし、小さなことからでも行動を起こし、継続する姿勢が大切であると学んだ。地域づくりは短期間で結果が出るものではないため、根気強く取り組む必要がある。

地域づくりに参加することで、地域に愛着や責任感が生まれる。自分の住む場所を良い方向に変えていく経験は、自分自身の成長にもつながると感じた。また、地域の人々と関わることで、新しいつながりや学びが得られるという意義も理解した。

1 はじめに

昨年度の実践編のインターンシップで小川地域棚田振興協議会に参加した後、ボランティア活動の「中田の棚田再生プロジェクト」や「中田の棚田サポーターズ」を引き続き活動することで、紀美野町の皆様とは大変有意義な時間と関係を得ている。

これらの活動を踏まえて、より知見を増やして新たな関係性を広げるため、また新たな活動や個性的な考えの企業等に出会うため、「令和7年度きみの地域づくり学校」に参加した。

2 座学について

今年度も、どの講義からも多くの知見を得ることが出来たが、中でも、3D技術を活かした博物模型専門の会社であるアンフィ合同会社について、野生動物の研究から、標本やレプリカ製作に至り、紀美野町で合同会社を設立、これらに関連性はあるが、それぞれ異なる環境に対応した一連の流れに関心を持った。佐々木代表は大学院修了後、NPO法人や大学特任講師の経験を経て、アンフィ合同会社を紀美野町へ移住して設立されている。社名のアンフィ「両側」にあるように、地方と都市部をつなぎ、それぞれの地の利を活用する考え方は、地方にとって情報や人口の流通の一助になっており、DX化を取り入れることで新たな技術を展開していることは大変参考になった。

博物館や研究機関、学会との関りに従業者が積極的に関わり、大学との繋がりを継続していること、住民も参加できるイベントの開催に努め、紀美野町での活動を企画、運営されていることは、モノづくりだけを考えている企業とは一線を画し、CSR活動を含む多くの関係性を持ちながら、モノづくりを行うモデルは各地域にとって大いに参考になると考える。

3 終わりに

農業をはじめとする、紀美野町との関係人口的な活動を継続しているが、アンフィ合同会社の一連の活動は新たなモデルとして興味深く、今回はインターンシップに参加できなかったため、今後はきみの自然体験館の訪問や各種イベントに参加したいと考えている。また昨年度に引き続き、地域の皆様や講師の先生とは出来る限り、関係を維持できるよう努力したい。

最後に本学校を運営いただいた皆様に感謝いたします。

私にとっては、昨年度に続いて2回目の受講となる地域づくり学校だった。1回目では届かなかった理解の深堀や新たな発見、前回とは違った見方など身をもって経験することができた。この経験は、既に複数回受講をされた先輩皆さんが口をそろえておっしゃっていたとおりのものだった。私は、令和8年度も是非参加させて頂きたいと思っている。(お酒も飲める二次会有りとなれば、その思いはより強くなる。)

今年度の学びを以下にまとめておきたい。現場で地域づくりを実際に推進されておられる方々から数々の言葉を学んだ。「地域住民が我が事として(不撓不屈の精神で)取組む」(木村氏)、「村に必要なことを村の人が取組み、それによって村の人が利益を享受する」「村人の愛情と誇りをつくる」(森本氏)など。これらに関係者が一丸となって言葉どおりに実践されているからこそ、今の秋津野があり今の南山城村があるのだろうと理解した。共有する目的に向かって共有意識のもと、住民自らがそれぞれの役割をいきいきと遂行している。そしてそのプロセス全体が、「関係人口の創出・増加」(藤田教授、阪井教員)につながり、「都市農村の協働」(藤田教授)を発動させている。更には「にぎやかな過疎」(岸上教授、図司教授)を生んでいるのであろう。「にぎやかな過疎」をいかにして形成するか、これが地域づくりの最重要のカギではなかろうか。「次世代の育成」(森本氏)という点では、「地域人教育」(牧野教授)は極めて重要なプログラムであることは論を待たない。地域の持続性を常に担保しなければならないからだ。いろんな人々が世代を超え地域を超えてバトンを引き継ぐことで、地域の持続性が担保できる。そんな過程において、地域に愛情と誇りを持たない人材は、そもそも定住住民の資格がないのではないか。話は逸れるが、定住に関連して「移住者」という言葉がある。農村では“「移住者」Aさん”と広報誌などでよく紹介されている。しかしその「移住者」という表現はいかかなものかと思う。「最近移住されてきた方」というならばまだしも、「移住者」という言葉にはまだ「定住者」ではない「よそ者」という語感を覚える。取り立てて「移住者」と言わず、「(一定期間以上居住し) 今後も住む意思のある人ならば定住者」(阪井教員)でよいではないか。そもそも都市には「移住者」はいない、逆に言えばほとんどが「移住者」である。農村においてこの差別的「よそ者」意識を氷解させないと、目指す「にぎやかな過疎」への到達は困難になるのではないか。「押井宮農組合の地域支援型農業の挑戦」、「しきしま暮らしの作法」(図司教授)は私にとって新たな発見であり、また「地方において足りないものは商品ではなく顧客視点」(日下氏)という指摘も心に刺さった。紀美野町に移り住んで、それぞれの人生の夢を実現している方々のお話にも、私は深い感動を覚えた。

お盆休みに「道の駅お茶の京都みなみやましろ村」を訪ねた。開店直後にも拘わらず既に大勢の人が店内で買物をしていた。バイカーと思われる若者も多くいた。ただ道の駅の概観からは他の道の駅との違いは感じられなかった。しかし駅長が出店者の方々とこやかに言葉を交わしつつ、忙しそうに店内を巡回しておられる姿を発見したとき、他との違いが分かった。駅長の仕事が一段落したところで、挨拶の時間を頂いた。お土産にむらちャプリンとむらちャロール、それに村抹茶を買って帰路についた。有田からでも思ったほどには遠くはなかった。

実践編

修了レポート

テーマ

「実践編で学んだことと
今後の展望」

小川地域棚田振興協議会様が取り組む「中田の棚田再生プロジェクト（以下、プロジェクト）」にインターンシップとして参加させていただきました。座学編フィールドワークにおいて、プロジェクトの現地見学及び活動状況の説明を受けたことで関心を持ちました。実施日数は計8日、以下の実務等を行ないました。

- ・10月5日 草刈り、刈払機のメンテナンス
- ・10月8日 畦際の草刈り、稲刈り、稲架かけ、脱穀、粃摺り
- ・10月12日 稲刈りイベント参加、運営サポート
- ・10月28日 粃摺り
- ・11月12日 畦崩し、耕運
- ・11月22日 草刈り
- ・11月25日 勉強会参加（協議会主催）
- ・12月13日 草刈り

棚田の米作りは、無農薬で育てる自然栽培。草刈り作業は多く、景観維持のためにも草刈りは必要。作業は重労働で斜面は危険でもあり、地道な作業の繰り返しですが、そうした地道な作業が棚田再生・農業の基本であることを学びました。

農作業は大変ですが、棚田の自然や景色に触れ、数百年前に生きた人々に思いを馳せ非日常的な体験もできました。また、年齢や経歴など異なる方と知り合うことができ、プロジェクトに集まる方々の優しさの一端を垣間見た思いです。何事にもファン作りが大切であることを学びました。

稲刈りイベントには、一般参加者、大学生、高校生など多くの方が参加した。昼食には釜で炊いた棚田米を美味しくいただきました。若い世代が棚田を知ることはプロジェクトの継続性のために大切。コミュニケーション作りが大切であることを学びました。

勉強会では、青森県の（株）アグリーンハート代表の佐藤様から有機農業についてお話を聞きました。確固たる企業理念のもと、理論に基づいた農法、土づくりの取組を学びました。事業を非常に尖らせることによる成功事例だと感じました。

プロジェクトの取組経緯を見ると、下記表の如くである。評価は年々高く、直近では、近畿圏内で審査された結果、「豊かなむらづくり全国表彰事業 農林水産大臣賞」を受賞。

※「中田の棚田再生プロジェクト」HPより抜粋・加工

	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
再生した 田んぼ(約)	3 畝 300 m ²	5 畝 500 m ²	4 反 4000 m ²	8 反 8000 m ²	1 町 2 反 12000 m ²
収穫量(約)			1000kg		2025年 1500kg
トピックス	<ul style="list-style-type: none"> 再生プロジェクト立上げ 米づくり開始 地域おこし協力隊1名着任 	<ul style="list-style-type: none"> 協力隊追加1名着任 棚サポの募集開始 県わかやまの美しい棚田・段々畑に認定 	<ul style="list-style-type: none"> 「つなぐ棚田遺産」に認定 いきもの観察イベントを初開催 	<ul style="list-style-type: none"> 海南高校美里分校で出張授業 ハッピーアースデー大阪に出店 紀美野町大雨災害 甲南女子中学校研修旅行受入 	<ul style="list-style-type: none"> 協力隊追加2名着任(2名卒隊)、1名離隊 滝川高校教育旅行受入 和歌山大学小川LPP発表会の開催 2025年協力隊1名卒隊

今後の展望として、プロジェクトの今後のあるべき姿について、上述青森県企業の取組を参考に、事業性を考え、有機農業を取り入れた品質・収量の向上、県内外企業との連携について検討が必要だと思います。若い世代の観点から、和歌山大学LPPとの連携強化も大切だと思います。

私が取組んでいる「終活」普及の観点から、地権者の棚田の継承(相続)について懸念があります。地権者とその相続人が所有を希望しなくなった場合、法人等への贈与など、行政が入り税制優遇を含む仕組み作りが必要になると推察いたします。

今後はボランティア「棚田サポーターズ」として活動を継続し、課題意識を持ち、解決に資するコミュニティビジネスの可能性等について考えてみたい。

最後に受入先の協議会の皆さま、現地で作業を指導していただいた皆さまに感謝いたします。

「古民家民泊うえみなみで過ごした時間」

きみの地域づくり学校を受講したいなと思ったきっかけのひとつは、実践編があることでした。社会人でほかの仕事体験ができることがすごく魅力的に、また、その経験がまだ何物でもない私の何かになるに違いないと感じた。

実践編は魅力的な候補がたくさん並んでいて、何回も読みながら、私は一体何回現地での実習ができるのだろうか。現実的に、宿泊はしたいが、日帰り。がつつりどっぷり1日体験したいが、体力的に可能かなど、考えてる中ずっと頭の中にあったのは、座学偏講師のカフェきたのを運営しておられる尾上さんのお話でした。景色が本当に素晴らしく、紀美野町に移住するきっかけとなった宿、『古民家民泊うえみなみ』ずっとずっと頭の中にその言葉があったので、第1希望で提出させてもらい、実践させていただくことになった。

いよいよ実践編スタートのその前に、事前に顔合わせで当主の南出さんに古民家内を案内していただいた。家系の系統図から、典子さんが何代目か忘れてしまいましたが、脈々と続いているおばあさまが実際住んでおられたお宅を民泊にされたとのこと。

昔のままの木工細工の家具や建具、冬でも午前中日が当たって暖かな縁側、視界には電線一つなく霧が晴れ、雲が流れる景色のなか、どっしりとした古民家が背景に紀美野の山を従えて今もどっしり建っていた。これだけで都会の人や古民家へあこがれている人はメロメロだろう。

今までの実習生は基本宿泊していたということで、私のような日帰り実習生はなかなか向かなかったのではなかったか。開店準備主に掃除が仕事であった。とはいえ、清掃スタッフがいたので私のために仕事を残してくれ、また、ゆっくりするお茶をしてお話する贅沢な時間をたっぷりとってくれた。古民家の掃除は自分の実家が木造平屋の瓦造りの家で畳や木の床の扱いには慣れていて苦労はなかった。

宿の利用者はリピーターのお客さんが多いこと。遠方から来られる人が多いことに、この場所に魅力を感じゆっくり過ごされたい方が多いのだということ、また、主催者として古民家を活用してワークショップの実施し、集客する方など、お客様が古民家やその周辺環境に価値を感じ自らの体験で魅力を創造し、貸主である南出さんも宿泊者もワークショップ参加者の方も相互に、古民家うえみなみを中心に同じ時間を共有することを楽しみにそこに集まっているように感じた。

実習を経て、今後の展望としては、これまで耕作放棄地を活用した事業や6次産業化などに興味があったが、社会問題である空き家問題について、空き家は使い次第で宝になるのではないか。旅館業法についてさっそく保健所に聞きに行き、妄想を膨らませることにした。何が誰かの特別になるかわからない。令和8年は始まったばかり。

きみの地域づくり学校実践編（インターンシップ）では、11月10日～13日の4日間、みさとみらいファームで農業体験をさせていただきました。

普段は地域おこし協力隊として山林で自伐型林業の施業をしておりますが、このインターンシップを受講することによって半林半Xの農業実践イメージをつかみたいと考えていました。

百姓は、多くの姓（職業）を持つ人々を示す言葉で、本来は多様な仕事をする庶民全体を指す、力強い言葉です。江戸時代の百姓は、年貢を納める人々（農民だけでなく林業・商業従事者も含む）を指し、領主と交渉する力強い存在でもありました。私は本来の「多様な職業を持つ庶民」という意味合いも持ち合わせている「百姓」を体験したいと思っていたのです。

実際に1日目のぶどう山椒畑の草刈り、肥料やり、支柱立て、2日目のぶどう山椒畑内の栗の切り株整理、梅畑の外周の雑木整理、3日目の梅畑の外周柵周りの草取り、梅畑内にある不要木の伐倒、4日目の紀州うすいえんどうの種まき、獣害対策用のイノシシの箱罠の設置等々、多様な作業を体験することができました。もう少し時間があればぶどう山椒や梅の木の剪定作業も体験できたと思いますが、少し残念です。

これだけ多様な作業を効率的にやっていくには段取りが大切です。天候にも左右されるし、農作物に適した時期、適した手入れがありますが、うまくやっているとしました。毎年経験を積んで進化しているのだと思います。紀美野町にこのような先輩農業従事者（フロンティア）がいるということは、これからの新規就農者にはたいへん心強いことだと思います。

以前からやってみたいと思っていましたが、ぶどう山椒畑の作業はこれからのいろいろな時期にいろいろなところで体験していきたいと思います。

紀美野町で農業をするには、獣害対策なしでは今や成り立たないことを再認識しました。野生動物による農林被害、森林生態系被害等の増加に伴い、捕獲の重要性が高まっています。わな免許を取得して、わな捕獲技術の向上をしていきたいと思います。

半林半XのXとなる「なりわい」を見つけて定住できるように準備していきたいと思いますが、焦らずに真にやりたいことは何なのか、体力的にも問題なくできるのか等じっくり検討して取り組んでいきたいと思います。そしておもしろいと思えるものを追求し、いつのまにか多業をこなしている姿になりたいと思います。このインターンシップを受け入れてくださり、多様な作業を体験させてくださった皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

私はきみの地域づくり学校実践編において、KATAKOTO CRAFTS で計4日間のインターンシップに参加させていただいた。この春オープン予定の紀美野町内の写真館の工事見学と石膏ボードへのビス打ち体験、そして、シェアハウスのクラウドファンディングのリターンとして、サウナエリア壁面へのお名前掲載に使用する木札加工と揮毫に携わらせていただいた。建築作業の体験は今回が初めてで、最初は道具の扱いや力加減が難しく、天井のビスを確認するために上を向いて、脚立に登ったり降りたり、想像以上に体に堪えた。そして、建築初心者对我来说は、写真館完成に向けた一部の作業を担当しているという責任感が重く感じられた。ビス打ちが甘ければ壁面を塗装する際にビスの凹凸が目立ち、打ち込みすぎると壁に穴が空いてしまうため慎重に作業を進めた。

また、クラウドファンディングのリターンに使用する木札の加工と揮毫を通しては、循環型の資源活用を学んだ。木札は写真館となる建物で以前使われていた床板を再利用したもので、木材の両端を切り落とし表面を加工・塗装することで新たな価値を与える過程を実践的に学ぶことができた。そして、これまでの書道の経験を活かして揮毫を任せていただけたことは大変光栄で、関わる人々の「好きなこと」や「得意分野」を尊重しながら役割分担を行う片桐さんの優れたリーダーシップを強く感じた。一人一人の強みを活かす取り組みは、地域に暮らす多様な人々の主体的参画を促し、持続的な地域づくりを推進する大きな力になると考える。

今回のインターンシップでは建築作業と木札加工・揮毫以外に加え、自伐型林業の現場を訪れたりシェアハウスの来客対応に同行したり、多岐に渡る活動内容で、1日1日異なる学びと気づきを得ることができた。地域づくりの観点からは、片桐さんの人脈の広さや地域を次世代へと繋ぐ使命感や挑戦心、そしてそれを行動に移す力が随所で見られた。思い描く地域像の実現に向けて積極的に活動されている片桐さんであるが、地域コミュニティに溶け込む過程や様々な取り組みに対する地域住民の反応など、多くの苦労や葛藤があったと思う。しかし、地域をより良く変えていきたいという一貫した思いに支えられた実践の積み重ねが多くの人を引き寄せ、未来に里山を残すビジョンの実現に向けて人々が集結し、数多くのプロジェクトやアクションが共に生み出されていると考える。

この先、何かしらの形で地域に携わる機会があれば、今まで出会った方々とのご縁を大切に、挑戦心と行動力を忘れず、地域のためにできることを考えていきたい。その際には、インターンシップ終盤で片桐さんからアドバイスいただいた「遊び心」を意識して、従来の発想や規範から一歩踏み出し、その先に広がる可能性を見つけられるよう、今後も学びを深め実践を重ねていきたいと思う。

令和7年度きみの地域づくり学校まとめ

発行日 令和8年3月1日

発行 きみの地域づくり学校運営協議会
事務局

〒640-1243

和歌山県海草郡紀美野町神野市場 226-1

紀美野町役場美里支所まちづくり課内

TEL：073-495-3462 FAX：073-495-3334

E-mail：support@kimino-cds.org
